
宗教心理学研究会ニューズレター

第24号 2016.3.31

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

第 13 回研究発表会(日本心理学会第 79 回大会公募シンポジウム)報告 宗教心理学的研究の展開(13)ー宗教／スピリチュアリティと臨床現場との関係:敵か味方か, それとも…?ー	1
企画趣旨	2
「臨床現場に見る宗教」シンポジウムを終えて思うこと	石井賀洋子 2
宗教と臨床現場:敵か味方か?ー臨床心理士からの話題提供報告ー	岡村宏美 3
宗教と臨床現場との関係:認知症高齢者の心的世界と宗教性	大村哲夫 4
臨床と仏教体験ー新たな臨床時代への展望ー	山口 豊 7
日本心理学会第 79 回大会公募シンポジウム「宗教心理学的研究の展開(13)ー宗教／スピリチュアリティと臨床現場との関係:敵か味方か, それとも…?ー」に参加して	岡田正彦 8
日本心理学会第 79 回大会公募シンポジウム 「宗教心理学的研究の展開(13)ー宗教／スピリチュアリティと臨床現場との関係:敵か味方か, それとも…?ー」に参加してー今後の日本の宗教心理学研究に思いをはせるー	加藤博己 11
寄稿論文:科学から見た宗教的心性の存在性について	佐藤興一 13
事務局からのお知らせ	29

第 13 回研究発表会(日本心理学会第 79 回大会公募シンポジウム)報告

宗教心理学的研究の展開(13)

ー宗教／スピリチュアリティと臨床現場との関係:敵か味方か, それとも…?ー

これまでのニューズレターでは、「研究発表会報告」の形でその内容を報告していたが、「臨床現場」をテーマにした今回の研究発表会では、各話題提供において「事例」を報告するものが主であった。そのため個人のプライバシーを保護する観点から今回のニューズレターは「研究発表会報告」をせず、話題提供者に自身の研究発表の概要をまとめていただき、その上で指定討論[丹野義彦先生(東京大学)]に対する応答、研究発表会の感想を執筆していただいた。加えて、今回の研究発表会に参加された方々にも研究発表会の感想を執筆してもらった。以下、まず今回の研究発表会の企画趣旨を記載し、その後各話題提供者からの報告、参加者の感想として、今回の研究発表会の報告としたい。

企画趣旨

宗教／スピリチュアリティと臨床現場については、これまでも様々な形で論じられてきた。それは、宗教／スピリチュアリティの有り様は、臨床現場と近い関係があるからではないだろうか。しかし、近いとはいってもそこには様々な関係が存在しているように思われる。それは「親和的な関係」の場合もあるだろう。反対に「敵対関係」や「緊張関係」といった場合も考えられる。

そのような状況を踏まえて、本シンポジウムでは、「宗教／スピリチュアリティと臨床現場との関係」についてどのように考えることができるのか、捉えることができるのかについて検討する。看護、介護、福祉、医療、心理における臨床現場に実際に関わっている方々に現場で感じたこと、経験したことを率直に語ってもらい、その上で、宗教／スピリチュアリティと臨床現場とを結び合わせようとした時にどのようなものが浮かび上がってくるのかについて討論する機会を持ちたいと考えている。

「臨床現場に見る宗教」シンポジウムを終えて思うこと

石井賀洋子(看護師)

1. 話題提供の概要

今回のテーマにある臨床現場は、相当に複雑な様相を呈している。現場に立ってみると、苦しむ患者を目の前にして、医療者は立ち尽くすしかないことがしばしばある。どんなに相手を思いやっているつもりでいても、伝わらなければどうにもならないこともある。そんなときの無力感は、耐え難いものである。シンポジウムの話題提供では、以上のことをふまえ、現場で起きている「宗教行動」に注目して発表した。

「臨床」という言葉は、広辞苑によると「病床に臨むこと」とある。病に大きく関係していることがわかる。医療従事者教育の場では、臨地実習、臨床実習という言葉が使われるが、実際に現地に臨むこと、現場で学ぶことを表している。この臨床現場で、どのようなことが起きているのか考えてみた。発表者は、宗教団体が運営する医療施設での調査を中心に行ってきた。そんな中で、「宗教は治療の妨げになるのではないか？」という質問を受けることがあった。さまざまな例があるが、「輸血を拒否する宗教」の存在はよく知られている。医療従事者からは、「あまり触れたくない」「聞かない方がいい話題」という言葉が聞かれることがあったが、具体的な出来事を紹介したい。

ベッドサイドに、たくさんのお守りを並べている患者。イスラム教徒の妊婦が、ハム入りの食事

に激怒する姿に驚いた看護師。亡くなった患者の魂が天に昇っていかれるように窓を開けようと看護学生に話しかけた看護師に対し、「迷信を教えないで」と遮った看護学校の教員。自らを仏教徒と名乗り「アーメンは嫌だけど」と言いながら、終末期医療をキリスト教系の病院で受ける選択をした患者。病室で患者と面会者が祈りを捧げている場面に遭遇し、驚いてそっとカーテンを閉めた看護師。こういった行動をどのようにとらえればよいのだろうか。

「宗教行動」は、慰霊的行動(祖先や亡くなった肉親の霊をまつる、仏壇にお花やお仏飯をそなえる、神棚にお花や水をそなえる)、現世利益的行動(身の安全や商売繁盛・安産・入試合格などを祈願しにいったことがある、お守りやお札など縁起物を自分の身のまわりにおいている、初詣に行く)、自己修養(信仰実践)的行動(宗教に関する新聞やパンフレットを読む、信仰グループに参加している、聖典や経典など宗教関係の本を折に触れ読む)にまとめられるとされている¹⁾。個人差はあるであろうが、年齢が上がるとともに、慰霊的行動や自己修養的行動が高まるという統計も出ている。臨床現場においては「生命の危機」に直面するという問題が重くのしかかるだけに、病を治すべく、また心を癒すべく宗教に救いを求める人びとは少なからず存在すると考えられる。宗教やその行動が意味するものに理解が

なければ、こういった現象は無視されるか、忌み嫌われるようなことになりかねない。救いを求める人びとに、どう寄り添うか。臨床現場に身を置くものとして理解しておかなければならないことは多いのである。

団塊の世代が 2025 年ごろまでに後期高齢者の仲間入りをする事になり、65 歳以上の高齢者人口は 30 % を超えるとされる。看護・介護が大きな社会負担となっている現実がある。現代医療の発達には、私たちに「いのちの選択」を迫るものとなっており、それは「生き方の選択」にもつながっているのではないだろうか。

2. 指定討論に対する応答, そのことで感じたこと, 考えたこと

丹野先生から、「実証に基づく宗教心理学」という言葉をいただいた。「宗教」は臨床で効果があるのかと考えたとき、研究者がその効果を科学的に証明できているのか、科学的な視点で測定できているのかと、改めて問われたように思う。信仰による療養効果等、実証を試みている多くの研究者が存在する一方、自分自身は「理解する」という視点にとどまり続けているのではないかと気づかされた。看護の現場は、どう対応していくのか。漠然としたものを、個人差で片付けてしま

っていいのだろうか。丹野先生の「実証」という言葉が重く感じられた。しかし、「実証」に近づくためには、感じるができなければならないのである。理解できる感性こそが、「実証」に近づくことであり、始まりなのではないかと考えている。そのためのできることに、それは臨床で考え続けることでもあると感じている。丹野先生からいただいた言葉を、これからの課題としていきたい。

3. シンポジウム全体を通しての感想

現代医療の現場に立っていると、医療技術の発展とともに、かつてないほど多様な価値観に囲まれていると実感する。病む人びとの求めるものに、どう向き合うか。背景を理解した上で、科学的な証明をも求められていることを改めて自覚した。治療の観点からすると、宗教／スピリチュアリティは敵になることもあるだろう。見方を変えれば味方でもある。どのように受け止めるかは、やはりその人次第といえる。病む人びとに寄り添いながら、これからも学び続けていきたい。

引用文献

河野由美 2011 「中高年と宗教」金児暁嗣編『宗教心理学概論』ナカニシヤ出版. p.135.

宗教と臨床現場: 敵か味方か? — 臨床心理士からの話題提供報告 —

岡村宏美(関西医科大学付属滝井病院精神神経科)

私はこれまで臨床心理士として宗教が関連した事例を複数経験したことをふまえ、話題提供した。発表の大前提として、私自身は宗教を「敵」と考えたことはなく、高額なお布施や信仰の強要がなければ、本人自身を尊重するのと同様に、本人の持っている信仰も尊重したいと思っていることをあげた。

臨床家の中には宗教や宗教性に関心のある人もいるが、関心がなかったり「ややこしい」と捉えて距離をおいたりする者が大半である。しかし、私は臨床家が宗教や宗教性に関われている

ことが、特定の信仰をもった相談者と出会う際には有用であると考えている。本発表では宗教性に関しては脇におき、宗教に対する理解を深め、様々な宗教のなりたちや一般的にはその宗教がどう捉えられているかを把握した上で話を聴く事が、宗教の影響がある事例への理解を深めやすいと思われる点について言及した。

宗教の影響を考慮して話を聴く場合は 3 点ある。1 点目、相談者本人が特定宗教を信仰している場合。この場合は宗教名、宗派名、入信の経緯(自分から? 他者の薦め?), 入信時期(本

人の心理的発達どの時期?), 信仰にまつわる葛藤はあるのか, 周囲の人の反応(肯定? 否定?)を確認し, 相談者にとっての信仰の意味を検討する必要がある。2 点目, 相談者の近親者が特定宗教を信仰している場合。この場合は宗教名, 宗派名, 入信時期, 経緯, 近親者と相談者の関係性, 相談者の反応(肯定的? 否定的?)を確認する必要がある。相談者の主養育者に信仰がある場合, 信仰のない家庭と比較して, 宗教的影響が強い育ちとなる可能性は高いと考えられる。3 点目, 相談者が宗教教育を受けた経験がある場合。この場合は宗教名・宗派名, 教育を受けた時期, 学校生活自体はどのようなものであったかを確認する必要がある。学校教育の場合, 相談者に宗教的関心があるかないかによって影響の差は著しいが, 考慮が必要である。いずれの場合においても, 宗教が本人の護りになる場合も脅かしになる場合もあることを十分理解し, 相談者が自分の人生の中で宗教・宗教性をどう体験しているか思いめぐらしながら聴くことが, 最も大切であると考えられる。

指定討論では丹野先生が発表者のなかに, 宗教を「敵」だとみなしたものがいないことに言及さ

れた上で, あえて「敵」となる場合を想定すると, 心理療法よりも信仰による救いを求める相談者が増加するときではないか?とコメントされた。また, 心理療法単体よりも, 心理療法に宗教的援助を加えたサポートでは, 後者のほうが効果量が高い, という論文をいくつか呈示された上で, エビデンスをどう示していくかが今後の臨床心理士の生き延びる道では?とのお話をされていた。私の意見は, 当日もお話したが, 各種心理療法でも, 信仰でも, ほかのものでも相談者の助けになることはなんでも構わないと考えており, むしろ, ケアテイカー側が助けになるものの特性(よい面も弱い面も)をよく理解し呈示することで, どれが自分にフィットするのか, 相談者が選べるようにできたらよいのではと考えている。また, 心理療法のエビデンスを量的に示すことは大変重要なことだが, 相談者ひとりひとりとの出会いを大切に研鑽を積み, 幅広いタイプの相談者のお役に立てるようにカウンセラーとしての質を高めていくことが最も重要のように思った。全体を通して様々な視点から宗教と臨床現場を眺めることができ, 大変刺激的であった。個人的にもとてもよい出会いをいただいた発表だった。

宗教と臨床現場との関係: 認知症高齢者の心的世界と宗教性

大村哲夫(東北大学)

はじめに

各種の意識調査の結果, 多くの日本人は「宗教」を信じないが, 宗教的習俗である墓参りや初詣は行い, 死後の魂を認めるという宗教的な心性をもっている。発表者は, 信仰を自覚し教団に所属するような「宗教」「信仰」をもつ人ではなく, 無自覚な宗教的心性をもつ人びとの心理や行動に関心を寄せている。発表者はこうした心性を「宗教性」と呼び, 「人びとが自分または, 自他の間に働き, 自らコントロールできない事象に対してとる合理性に捉れない態度, または意味づけ」(大村, 2010, Saito, Ohmura, Higuchi, & Sato, 2015)と規定している。おみくじやお守りを大切にし, ジンクスを気にするなどの行為は人の

心理や行動に影響を与え, 宗教的心情の根柢となるからである。

したがって発表者は, 「宗教」と「臨床現場」ではなく, 「宗教性」と「臨床現場」と置き換えて考察したい。臨床現場でクライアントと会う場合, 心性の根柢にある宗教性を蔑ろにすることはできない。発表者は心に宗教性がある以上, 「敵」でも「味方」でもなく, 「心」そのものであると考える。

本発表の概要

今回の発表では, 認知症高齢者のもつ宗教性がどのように展開され, それが死の受容にどう関わったか, ということを報告した。

「認知症」は, 人格の変化と介護の困難さのた

め忌み嫌われている疾患である。全国に分布する「ボケ封じ」や「ぼっくり祈願」などの民間信仰の存在は、こうした症状になることなく健康な状態を維持したいという人びとの願望を反映していると言える。しかし「認知症の人又はその予備軍」は 65 歳以上で四人に一人、今後大幅に増加する（内閣府、2015）とされ、多くの人が死を迎える前に通過する一般的な症状である。死へのプロセスとしての認知症を患うことに、何らかの意味を見出すことができるのだろうか。

発表者は臨床心理士として認知症高齢者へ、軽症時から死に至るまで数年に亘る継続的心理面接を行い、その言動を観察・分析した。

その結果、1、本人にとって大切な記憶は保持されていること。2、症状の進行と共に意識水準が低下し、死者や神仏が出現したり過去の記憶が「現実」として再現されること。3、こうした不合理な世界は、本人にとって「Psychic reality（心的現実）」であり、本人のもつ心的に健康な合理的解釈と矛盾することなく受容可能であること。などがわかった。またこうした生と死が混在する世界に遊ぶことで、死の不安が軽減し穏やかな死の受容をもたらし、家族にとってもよい看取りとなることなどが示唆された。

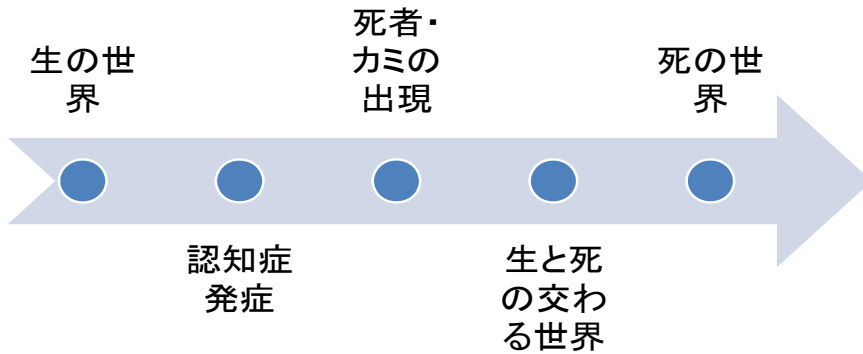
今回紹介した 80 代男性の 4 年にわたる事例では、訪問当初は太平洋戦争当時や戦後の思い出話が語られていた。話には整合性があり合理的で、正確であると推定可能な内容であった。しかし認知症の進行と共に、現実の世界に過去のエピソードが混入するようになり、非合理的な心的世界が展開されるようになった。死者（父母や祖父母、兄弟、幼馴染みなど）や不在の人物（息

子、「ヒラリーさん」が登場し、「お地藏さん」「仏さま」「幽霊」「お化け」など超自然的な存在も出現するようになった。出現する死者は、本人にとって親しみのある存在であることが多く、恐怖や不安を惹起するものではなかった。超自然的存在の出現に対しても同様で、むしろ死や宗教的存在に対して親和性を感じていたと観察された。語りはエピソードとして死と再生を繰り返しながら、大きなストーリーとして徐々に死に近づいていく傾向が見られた。

これらのことから認知症高齢者の世界は、現実と非現実の混在する世界、生と死の共存する境界領域であり、症状の進行と共に徐々に非現実世界・死の世界の領域に移行していくと考えることができる。この緩やかな移行によって死に対する不安が緩和され、親しみのある思い出の世界への帰還として捉えることが可能となり、死の受容につながるものと考えられる。またこうした「親しい死者のいる世界への移行」という捉え方は、認知症高齢者の家族にとっても穏やかで安心できる看取りにつながる。患者死後における遺族のグリーフ・ワークにも効果的であろう。

現代人にとって忌避される「認知症」は、その介護負担の重さや徘徊などの問題が存在するため決して軽視できるものではない。そのための支援策が必要であることは発表者も十分認めることである。しかし死の受容という点から見れば必ずしも否定的な面だけではない。認知症高齢者の心的世界を死の受容プロセスとして肯定的に見ることで、本人や家族にとって受け入れ易い死の受容につながる一面もある。

認知症高齢者の死の受容



22/sep/2015

F.M.TOHMURA

29

指定討論者へのリプライ

宗教に「効果」があるなら、心理療法家は宗教に取って代わられるのではないか、という趣旨の指摘をいただいた。「公認宗教師」のようなものができれば、「公認心理師」と競合する可能性があるということである。

実は、東北大学大学院文学研究科では「臨床宗教師」養成研修をはじめており、筆者もその養成にかかわっている。欧米の「チャプレン」のように公共空間（病院や高齢者施設など）でこころのケアができる宗教者（仏教僧、キリスト教聖職者、神道など）を拡げていこうという試みである。東日本大震災後、2012年に東北大学に実践宗教学寄附講座を開設し、その後、龍谷大学、鶴見大学、高野山大学で開講し、2016年度から上智大学、種智院大学、武蔵野大学、さらに愛知学院大学で養成がはじまり、すでに修了生は150名を超えている。2016年2月には日本臨床宗教師会が宗教学者の島藺進氏を会長に、宗教者・学者・医療者などを迎えて発足したところである。会では「認定臨床宗教師」の認定を行い、倫理や研修・研究を行っていく。さらに類似する資格として日本スピリチュアルケア学会認定のスピリチュアルケア師（認定・専門・指導）も存在する。心理職と競合する状態はすでに生じていると

言ってよいし、今後はさらに進むであろう。

心理臨床の現場では宗教や宗教性といった心性にかかわる問題が少なくない。心理職としての専門性とは何なのか、宗教者との違いは何であるのかを、心理臨床に携わる者からも明確にしていく必要があると考えている（大村、2015）。

文献

内閣府 2015 『平成 26 年度版高齢社会白書』

大村 哲夫 2010 「2009 年度学術大会 概念構築ワーク・ショップ「お迎え」現象と心理療法—死の文化とスピリチュアル・ケア—」『日本スピリチュアルケア学会ニューズレター No.3』

大村 哲夫 2015 「心のケア・ワーカーとしての宗教者「臨床宗教師」とは何か？：臨床心理士との比較から」『東北宗教学』10, pp.1-17

Saito, C., Ohmura, T., Higuchi, H., & Sato, S. 2015 Psychological Practices and Religiosity (Shukyosei) of People in Communities Affected by the Great East Japan Earthquake and Tsunami *Pastoral Psychology* () 1-15, DOI

10.1007/s11089-015-0685-x

臨床と仏教体験 — 新たな臨床時代への展望 —

山口 豊(東京情報大学・臨床心理士・高野山真言宗僧侶)

I. 話題提供の概要

発表テーマ 臨床と仏教体験—自らの体験を振り返りながら—

1. はじめに

ユングは、心理療法の価値は療法家自身の神経症的分裂の統合によって証明されるという。このユングの言葉は、筆者にとって自らの臨床効果の体験から真実であろうと考えている。また、この言葉は、臨床効果を自らが会得していない限り、心理療法を他に用いることには限界があるということである。そのような意味において、僭越ながら私自身の仏教体験(禅、ヨーガ、瀧行、密教)による臨床効果を紹介していきたい。

私は、通常「臨床心理学・ヘルスカウンセリング学・精神保健学」に関する研究・教育活動をしている。また、臨床心理士として学生相談室相談員を兼ねている。一方、学部生のころから、仏教には強い関心を持ち続け、ささやかな実践をしてきた。

2. 森田療法と禅(20代～)

学部生のころ、神経症傾向であった自分をなんとかしたいと考えていたころ、偶然、森田療法に邂逅した。はじめて「あるがままに生きる」知恵を知り衝撃を受けた。従来の自分の生き方と180度異なっていたからである。しかし、森田流の生き方は自分に神経症とは何か、どうすれば乗り越えられるかを教えてくれた。周知の通り、森田療法と禅仏教は関連があり、自然に禅仏教にも関心を持つようになった。そのころ、自分の所属する大学に参禅会のサークルがあることを知るが、その会の主宰は臨床心理学の教授であった。導かれるように、週1回1時間30分の座禅会に参加した。初めは足の痛さに苦しんだが、やがて精神を集中させることができるようになり、神経症傾向は薄紙をはがすように落ちていった。

3. 禅からヨーガへ(20代後半～)

その後、就職を経て参禅会から離れると、神経症傾向が再び戻り、新たな臨床効果を求めている。

そこで、ヨーガ道場に通うようになり、自宅でも熱心に取り組んだ結果、禅以上にリラクゼーション効果を体感し、短時間で身体の緊張を緩めることができ、大変気持ち良く、自らの神経症傾向には効果的であった。

4. ヨーガから密教へ(30代半ば～)

その後、新たに疾病恐怖の神経症傾向にさいなまれるようになった。死の恐怖はなかなか乗り越えることができず苦悩し、自己肯定感やメンタルヘルスは著しく下がり、新たな臨床効果の必要性を痛感していた。そのころ、密教との出会いがあり、修行の一つである瀧行をさせていただくことになった。瀧行は簡単な行ではなかったが、終わった後のすがすがしさは素晴らしいものだった。心の穢れが落ちていくという感覚であった。臨床心理学的に言えば不安・抑うつ的なメンタルヘルス状態から雲が晴れた明るくスッキリしたメンタルヘルス状態に変容したとも言えるものだった。同時に、自らの感覚が今まで以上に鋭敏になる感覚もあり、現実世界とのギャップに困惑することも生じた。

5. 密教加持祈祷へ(30代後半～今日)

瀧行は継続していたが、密教との出会いの中でより衝撃的だったのは「加持祈祷(祈り)」であった。「加持祈祷」に出会うまで、宗教体験による臨床効果とは身体行や瞑想体験を通じた「心身の安らぎ」と考えていた。宗教における「祈り」とは、臨床効果を高めるための付随的なものとあまり気にも留めていなかった。禅、ヨーガ、瀧行はそれぞれ異なるにしても、共通に身体行を通して心身を清め、変容していくと理解できるからである。ところが、密教の「加持祈祷(祈り)」は、受け取る側はとりわけ身体行を実践するわけではない。気付かぬ場合もある。私の場合、前述したように死の恐怖を伴う不安は容易に乗り越えられぬ時に、密教「加持祈祷」を体験する機会を得、その後不思議と死の恐怖が軽減し、自己肯定感やメンタルヘルスの復調を感じる事ができた。

密教僧侶の「祈り」は寺院から遠く離れた自宅で受けるだけなので、効果のメカニズムを科学的に理解することは困難である。ただ、臨床効果を得たことで密教の加持祈祷に魅せられ、臨床心理学の理論や心理療法の中に加持祈祷をいかに導入できるか、今後とも検討していきたいと考えている。

Ⅱ. 丹野義彦先生の指定討論に対する応答およびそのことで感じたこと、考えたこと

丹野先生には、宗教が臨床にとって敵か味方かという視点から、ご質問を頂きたいと思います。一般的には、宗教は臨床にとって有用性のほうが高いと感じますが、より詳細には、その宗教性によって異なる場合もあるという感じです。特に、仏教をはじめとする東洋系宗教は概して、臨床心理学には親和性があると思います。なぜなら、東洋系宗教は仏教・ヒンズー教・道教など、姿は異にしても自己の内面に沈潜する行法を有し、「本来の自己」の発見に向かおうとするからです。したがって、信徒はマックス・ウェーバー流に言えば、「神の容器」を実感することになることでしょう。そこで、臨床心理学には有用な視点や技法を多く提供できると思います。ただ、一口に宗教といっても、一神教の場合状況は異なると思います。自己の外側に絶対神を想定し信仰していくので、信徒はマックス・ウェーバー流に言えば、「神の道具」にならざるを得ないからです。そこで、どうしても自己の内面に沈潜していく技法は軽視されやすいこと、かつ他の宗教性を排斥する傾向

になりやすいからです。そこで、臨床心理学的には東洋系宗教ほどには有用性が見られないと考えております。このようなことから、臨床心理学にとって、宗教が敵か味方かという視点を今後とも検討していくことは宗教の臨床性を検討する場合は重要な視点ではないかと考えています。

Ⅲ. シンポジウム全体を通しての感想

今回発表するにあたり、宗教についての体験を日本心理学会でこのように検討できるというのは、新たな時代を迎えたのだなという感慨を有しております。そして、このことは科学における主観客観という問題を検討する機会にもつながるのではないかと考えています。言い換えれば、「科学とは何か」という視点の議論にもつながるでしょう。客観的データこそ科学的という視点の是非も検討範囲になるでしょう。更には、時代の価値判断態度においても、科学的でなければ非科学的とレッテルを張り、さげすむ現代文化の価値判断態度への疑問にもつながるのではないのでしょうか。このように、今回取り上げた「臨床における宗教性」というシンポジウムテーマは私たち現代文化のパラダイム変化をも検討する壮大なテーマなのではないかとも感じました。私個人の発表を通じて感じたことは、臨床における宗教の意義は、他の人の宗教体験につながる可能性もあるかなと思います。また、アカデミズムの場における宗教性の検討に、単なる哲学としてだけではなく、本来の宗教の意義を検討していくことにもなるのではないのでしょうか。

日本心理学会第 79 回大会公募シンポジウム

「宗教心理学的研究の展開 (13)—宗教／スピリチュアリティと臨床現場との関係：敵か味方か、それとも…?—」に参加して

岡田正彦 (栃木県立岡本台病院・
精神保健福祉士・認定カウンセラー)

2015 年 9 月 22 日 (火)、名古屋国際会議場にて開催されました、日本心理学会第 79 回大会公募シンポジウム「宗教心理学的研究の展開 (13)—宗教／スピリチュアリティと臨床現場との

関係：敵か味方か、それとも…?—」に参加させていただきました。

私は、宗教 (心理) 学を修め、精神科病院をフィールドに臨床経験を積ませていただき、四半世

紀が過ぎました。最近はそれでも所謂「医療観察法」における対象者の支援や統合失調症を主症状とした長期入院患者様の地域移行支援並びに地域定着支援等にも関わらせていただくようになって参りましたが、その経験は極僅か、その大半はアルコール臨床に係る経験でした。御周知の通り、アルコール依存症者の回復支援の原型は AA (Alcoholics Anonymous) にあると言っても過言ではありませんので、セルフヘルプグループではありますが、スピリチュアリティの基盤は、私の経験の傍らに常にありました。そのため、今回の「宗教/スピリチュアリティと臨床現場との関係: 敵か味方か、それとも・・・?」と称した本シンポジウムの企画代表者であり当日の司会者でもありました松島公望先生(東京大学)のテーマ設定は、とても刺激的で、どのような展開になるのか、始まる前からとても楽しみでした。

話題提供者(所属は発表当時)は、石井賀洋子先生(大真会大隈病院)、岡村宏美先生(関西医科大学附属滝井病院)、山口豊先生(東京情報大学)、大村哲夫先生(東北大学)の 4 名の臨床家でもあり研究者でもある先生方でした。

石井先生は看護師としての臨床経験から「臨床現場にみる宗教」のテーマで、岡村先生は臨床心理士としての臨床経験から「宗教と臨床現場の関わりを考える」のテーマで、山口先生は職種を超えて自らの実体験(仏教体験)を基に「宗教/スピリチュアリティと臨床現場との関係」に即したテーマで、大村先生は研究者として「信仰を自覚し教団に所属するよう『宗教』『信仰』をもつ人ではなく、無自覚な宗教的心性をもつ人々の心理や行動に関心を寄せている」とのことで、その関心を寄せている心性を「宗教性」と称し、「認知症高齢者の心的世界と宗教性」のテーマで、興味深い御発表を拝聴することが出来ました。

今回、松島先生より御依頼いただきました内容は、本シンポジウムに参加しての感想とのことでしたので、総ての先生方の御発表に触れさせていただき紙幅はございませんので、本稿では、山口先生の御発表を拝聴させていただいて、触発された部分もございますので、日頃、私を感じていること、考えていること等を、以下、徒然なるままに記させていただければ幸いに存じます。

私は、根っからの臨床家ですので、いつも目の前のクライアントに対して、どうすれば有用な支援が出来るのか、そればかりを考えてきました。

医学の世界では(医学の世界に限らず、研究者の先生方の共通認識でも) EBM (Evidence-based medicine) が重要で、それ以外は、(被害的かもしれませんが)あまり重要視されていないように思われます。それ故、経験 (Experience) は(どんなにその個人にとって重要で、長期にわたったものであったとしても)、EBM の前では(これも私の実感? 或いは偏見? かもしれませんが)、取るに足らない産物になってしまうような気がしてならないのです。

上述のような私的な印象をもっていたものだから(だからと言ってその風潮? に承服しかねるような個人的な曇りもあったものだから)、山口先生の御発表には、とても勇気を感じたと同時に、エンパワーされ、共感をもつことが出来たのです。AA のミーティングハンドブックの序文にもありますとおり、「経験と力と希望のわかちあい」が「共通する問題の解決」に必要な鍵であると、私も感じていたので、山口先生の経験に重きを置いた御発表の視点には、強い興味・関心を持ちました。

私も、かつて、有用性を重視するが故に、様々な学会やワークショップに参加し、これは効果があると称される様々な技法を身につけようと努力してみました。しかし、アルコール依存症という手強い病気の前では、(勿論、私の臨床家としての力量の問題もあったのですが)「無力」でした。

そんな折、私は AG (Awakening Group) に出会い、そのハンドブックの中で、「本人・家族・関係者の順に回復は遅い」というフレーズに出会いました。確かに、AA や Al-Anon 等のセルフヘルプグループのミーティングに参加し、「経験と力と希望」をわかちあうことが回復の指標とするならば、MAC (メリノール・アルコール・センター) 等のリハビリテーション施設に通所或いは入所しているアルコール依存症者御本人は、スリーミーティングと称して、1 日に最低三回、「経験と力と希望」をわかちあうミーティングに参加しているわけですから回復が一番早いのは当然で、その御家族でも最低週 1 回は Al-Anon に

参加し「経験と力と希望」をわかちあっているわけですから「本人」の次に「家族」が挙げられているのは必然なのかもしれません。しかし、関係者と呼ばれている臨床家達はどのようにでしょうか？多分、セルフヘルプグループへの参加が習慣化されている輩は稀ではないでしょうか？これでは、関係者の回復は「遅い」どころか、関係者は回復しないで、クライアントと対峙していくことになってしまうのです。

そこで私は、ある時期から、エビデンスに頼るのではなく（と言ったら言い過ぎかもしれませんが）、そもそも臨床家は、クライアントに対峙する自分が道具なのですから、道具としての自らを磨く必要があるのではないかと思うようになり、目の前のクライアントに対しては「無力」かもしれませんが、自らを変えることは出来る（かもしれない）ので、セルフヘルプグループに自らが通い、自らがそこに集う仲間と「経験と力と希望」をわかちあい、回復（変化）し、回復（変化）しつづける自分が、自分の目の前にいるクライアントと再び対峙することによって、そのクライアントとの関係の中で、何か変化をもたらすことが出来ないか、模索していくようになって参りました。この支援は、やり始めたら、自分が臨床家である以上、一生続けなければならない方法であると思っておりますので、今後も続けていこうと思っております。松島先生より、本シンポジウムの感想を書く機会を与えていただきましたところ、上述のような自らの経験や思いを語り（書き）たくなってしまうような、そんな刺激的で誘発的なシンポジウムでした。

本シンポジウムの最後に、丹野義彦先生（東京大学）の指定討論がございましたが、シンポジストの先生方が、どちらかという「宗教/スピリチュアリティと臨床現場」との関係を好意的に捉えていたということもございまして、敢えて「敵対関係」を想定して、問題提起して下さったのは、有意義でした。

丹野先生の指定討論を拝聴させていただいて、私は、既述した感想も含めて、更に、「本人」「家族」に対峙する「関係者」は、医師であれ、看護師であれ、臨床心理士であれ、理学療法士であれ、作業療法士であれ、社会福祉士であれ、

精神保健福祉士であれ、神父であれ、牧師であれ、僧侶であれ、神主であれ、「本人」「家族」からみれば、やはり回復（快復）のアイテム（「道具」）なのではないかという思いが強まってきました。従いまして、医師であれ、看護師であれ、臨床心理士であれ、理学療法士であれ、作業療法士であれ、社会福祉士であれ、精神保健福祉士であれ、神父であれ、牧師であれ、僧侶であれ、神主であれ、「道具」としての自らに常に磨きをかけ、日夜変化（成長）し続ける努力が課せられているのだと思いました。

どの「関係者」を選ぶかの権限は、丹野先生の指定討論を拝聴させていただいて、クライアントの側に最早委ねられている、と感じました。

その意味で、誤解を恐れずに記させていただきますと、最早、「宗教/スピリチュアリティと臨床現場」の関係といった構図ではなく、医師も、看護師も、臨床心理士も、理学療法士も、作業療法士も、社会福祉士も、精神保健福祉士も、神父も、牧師も、僧侶も、神主等々も同じ土俵に並列に置かれて、敵対（競合）関係にあると言っても過言ではないのかもしれないと思いました。そして、そこで、関係者は、いつでも、どこでも、クライアントの皆様を選択していただけるように、「道具」としての自分に磨きをかけ、日夜変化（成長）し続けていかなければならないと、強く感じた次第です。

しかし、その一方で。アルコール臨床に比べると、まだまだ僅かな経験なのですが、ここ数年、「医療観察法」における対象者やその御家族を支援させていただく機会も与えられており、そこでの支援は MDT（Multi-Disciplinary Team）の一員として実践させていただいております。このアプローチは、経験上、とても「有用性」が高いと感じております。その意味で、いつか、「宗教/スピリチュアリティと臨床現場」の関係が、MDT として捉えられる価値観が育つ土壤が、日本にも出来上がると良いのではないかと、この感想も持ちました。

既述させていただいた如く、様々な思いが、自然と張り巡らされるような、刺激的なシンポジウムを企画して下さいまして、誠に有り難うございました。感謝です。本シンポジウムに参加することによって、私自身、また少し、自らの変化の兆し

を感じ取ることが出来たような気が致します。

日本心理学会第 79 回大会公募シンポジウム
「宗教心理学的研究の展開(13)ー宗教／スピリチュリティと臨床現場
との関係:敵か味方か、それとも…?ー」に参加して
ー今後の日本の宗教心理学研究に思いをはせるー

加藤博己(駒澤大学:非会員)

2015 年 9 月 22 日～ 24 日に、名古屋大学を
開催校とし、名古屋国際会議場において、日本
心理学会第 79 回大会が開催されました。その
内、9 月 22 日(火) 13:10～ 15:10 に、会議場
第 13 会場 2 号館 222 において、公募シンポジ
ウム「宗教心理学的研究の展開(13)ー宗教／
スピリチュリティと臨床現場との関係:敵か味方
か、それとも…?ー」が開催されました。登壇者は
以下の 6 名(敬称略)でした(所属は発表当時)。

企画代表者・司会者:

松島公望(東京大学)

話題提供者:

石井賀洋子(大真会大隈病院)

岡村宏美(関西医科大学附属滝井病院)

山口 豊(東京情報大学)

大村哲夫(東北大学)

指定討論者:

丹野義彦(東京大学)

本シンポジウムでは、フロアからの発言・質疑
応答の時間がなかったので、企画代表者・司会
者の松島先生に感想をメールで送ったところ、ご
丁寧なお返事とともにニューズレターへの執筆依
頼があり、この場を借りて感想を述べさせて頂く
機会を得ました。シンポジウムの感想ですので、
本来ならばシンポジウム全体の内容を詳細に述
べるべきところですが、私には手に余る仕事なの
で、シンポジウムの概要は他の方にお任せし、シ
ンポジウムに参加し、啓発された事柄について、
非会員の立場から見た雑感を述べさせて頂きま
す。

まず、本シンポジウムの主題は、「宗教／スピ
リチュリティと臨床現場との関係」ですが、最近流
行の"マインドフルネス"瞑想を取り入れた心理療
法には、マインドフルネスを中核とするものと、マ
インドフルネスをプラスアルファで部分的に取り
入れているものがあり、両者には思想に大きな
違いがあります。これと同様に、スピリチュアリ
ティについても、スピリチュアリティをメインに研究・
実践するものと、スピリチュアリティを部分的に
取り入れた研究・実践とがあるように思います。そ
そも、アメリカ心理学会(APA)第 36 部会の名
称が、2012 年に "The Society for the
Psychology of Religion and Spirituality"へと
変更となった背景にある、宗教的枠組みに収まら
ない"スピリチュアリティ"とはどのようなものか
という根本的な議論がまだ出し尽くされておらず、
金児(2011)『宗教心理学概論』に記述はあるも
のの、「スピリチュアリティ」に対する共通認識が
共有されていないように思われます。また、初め
て、あるいは久しぶりにシンポジウムに参加する
人が、スムーズに議論に入ることができるよう
に、これまでの 13 回のシンポジウムの経緯を一
目で理解できるような体系図があると、とてもあり
がたいと思います。

次に、今回のテーマの副題「敵か味方か、それ
とも…?」について、指定討論の丹野先生より、
敵側の話題提供者がいないとのご指摘がありま
した。私が所属している学会の一つである日本仏
教心理学会では、仏教関係者(僧侶や仏教学研
究者)と心理学関係者(臨床家や心理学研究者)

の両者が寄り集まって、お互いの関係性を模索しています。ところが、この宗教心理学研究会には、宗教関係者(宗教者や宗教学者)の関与がそれに比してとても少ないという当たり前のような事実気づきました。宗教心理学研究会が、将来的に学会化する上で、宗教者の加入には諸々の困難が予想され、宗教学者には精神分析学や深層心理学などの研究者が多くなるのが予想されますが、この点が会員数を維持、増加させる上での大きな課題だと思いました。

研究会を発展させる方向性の一つとして、例えば、日本心理学会の年次大会でシンポジウムを行うことでの登壇者、ならびに参加者の経済的、時間的メリットをこのまま生かし、APA の部会のように、日本心理学会内の部会として公認を受け、通常の学会のように年会費を徴収し、年次大会参加費は日本心理学会への大会参加費のみ、あるいは、当日参加者に若干負担してもらいつつ、学会誌を発行していくというスタイルを取ることではできないでしょうか。これですと、寄稿者や査読者を日本心理学会会員から広く募ることができ、新規のリスナーがシンポジウムに参加しやすいというメリットが保たれると思います。

話が横道にそれましたが、副題について言えば、宗教には様々な役割があります。特に日本の宗教は、檀家制度のように徴税のための戸籍制度としての役割をかって担っていたり、祭りや行事のような非日常的行事の象徴的存在であったり、学問の場やそれを通しての相談機関としての役割を担ったりと、様々な機能を果たしてきたと考えられます。そうした中で、心理療法の登場は、相談・問題解決の役割において、日本の宗教に取って代わった部分があるかも知れません。そういった意味では、既存の宗教にとって、心理療法是敵だった面があるのかも知れません。

指定討論者の丹野先生より、ご専門であるエビデンスの話が出てきましたが、エビデンスがない、もしくは、出せていないことは、効果がないことを意味しないので、エビデンスを出せていないものが淘汰されることの危険性については配慮する必要があると思います。それと、討論できませんでしたが、仮に各宗教・各宗派の効果測定をするならば、プラシーボ効果以外にも、厳しい

修行法のように多大な努力を要する宗教的行為は、認知的不協和理論に基づくと、主観的に高い効果が生じるので、注意が必要だと思いました。

以上、とりとめの感想となってしまいましたが、日本心理学会で、毎年継続的にワークショップやシンポジウムを行っていること、そして、その記録や発表内容をホームページで公開していることは大変意義深いことだと思います。古い会員の方はご存知かもしれませんが、1989 年に行われた日本心理学会第 53 回大会において、「東洋的行法の心理学的研究(1)『行』と心理学の関わり」と題されたワークショップが行われ、これをきっかけに「東洋的行法研究会(後に、東方医学・心理学研究会に改名)」が作られました。その後、10 年以上にわたって、日本心理学会でのワークショップを中心に、国際心理学会議、国際健康心理学会などでのシンポジウム、あるいは、単独での国際シンポジウムなどが毎年行われていました。これらの一部は、学術誌や学術書にまとめられていますが、現在ではこれらの活動をあまりご存じない方も多いと思います。

それゆえ、本研究会には、研究会の活動記録や研究成果を確実に残して欲しいと思います。具体的には、ホームページに、本研究会設立の経緯や立ち上げメンバー、設立趣旨、歴代会長による本会への思いなどのアーカイブが充実すると良いと思います。ホームページから過去の研究会のページを見ると、既に当日配布の資料が添付されていたり、当日の様子が写真で挙げられていたりという工夫がなされています。今後とも、当日の資料の添付、それが無い場合には、当日使用したパワーポイント原稿を修正して pdf 化して掲載するなど、小さな努力で発表内容を常に掲載し続けることは可能です。

また、次年度の日本心理学会の年次大会は、国際心理学会議との共同開催ですので、日本の宗教心理学を海外にも発信して欲しいと思います。

最後に、研究会事務局を、東京大学松島公望先生が継続的に務めてこられており、企画・司会者や話題提供者がやや固定化してきているように見受けられます。研究活動の発展と個人の負

担の軽減・分散のために、研究会会員のさらなる積極的な関与と分担が望まれます。また、日本人間性心理学会や、日本トランスパーソナル学会、日本トランスパーソナル心理学/精神医学会、「宗教と社会」学会、日本仏教心理学会、日本マインドフルネス学会といった、領域的に重なる

関連学会や研究会が多数あるので、お互いの仕事をオープンにして、コラボレーションしている、会員や参加者を奪い合うことなく、また、お互いの研究成果を知らないまま労力の無駄をすることなく、実りあるものに発展していければと願って止みません。

寄稿論文

科学から見た宗教的心性の存在性について

佐藤興一

1. 問題意識

多くの宗教の祖師や先哲の教義または思想の中には、宇宙の理法が説かれていて、その理法を感得する人々の心に宗教的な感化が齎されてきた事は歴史的事実である。だが、人間の宗教的心性を、人間の宗教的感情を惹起させる内的仕組みと捉える場合、その存在根拠を把握しようとする考察においては、人間の進化発展の過程での副産物として発生してきたとする考え方や、物質で構成される人間に生得的に付与されているとする二元論的な考え方がある一方で、現代の科学的宇宙論においては、マクロ的に観測・測定される現在の宇宙に微視的な量子の世界であるミクロの宇宙(次元)が畳み込まれており、量子の特異な性質が、人間の意識の伝達や、人間が宇宙的な神秘性を感得する仕組みにも関わっているのではないかとする推測が、量子(素粒子)物理学の研究の成果を拠り所として提唱される状況になってきた。そのことは、科学哲学的に見れば、従来の意識研究にかなり大胆な提案がなされたものとして、意識考察上のパラダイムシフトとして捉えることも出来るが、逆説的に考えれば宗教的心性の発生の仕組みについては、合理性のある説明が従来から十分では無かったということの意味している。確かにfMRI(核磁気共鳴画像法:脳神経の活動を間接的に計測して脳賦活地図を得ることが出来る装置)などの精密な測定機器の進歩によって、脳の機能そのものは非常に説明が進み、量子脳理論では心の発生が脳細胞の水分子を構成する素粒子の状態に起

因することが一つの仮説として提唱されている。しかしながら、人類的なハードプロブレムとされるクオリア(心的内容の実質・意識内容の実質・意識内容に伴う質感の総称)の発生の仕組みの解明については、今日でもほとんど将来展望が描けていないといっても過言ではない。つまり、意識の発生についての根本的な難問「物質で構成される人体から如何にして意識が生じるのか」については、発生の根拠解明についての方法的展望が見出されていない。この「心脳問題」という難問に対して、先人は様々な理解をしてきた。仏教[華嚴教]の唯識論は、心(意識)そのものの存在を所与の事柄とした上で、物質は心(意識)の働きが作り出すイメージであるに過ぎないことを提唱した。唯識論における人間の心の機能の仕方(八識説)と悟りの心の機能の仕方(六波羅蜜)についての発想は、今日では心(意識)の臨床的改善にも応用されている。量子物理学が将来において唯識説に科学的説明を与えるかもしれないという期待もある。祭祀などの文化人類学的・社会学的証拠からは、人類がかなり古い時代から原始的なレベルにしる宗教的心性またはそれに類する心性を持っていたことが分かっているが、全て文化相対的に人間の心に寄生した心性なのか、知的生命体に原初的に付与された特性なのかについての論考はない。宗教の発生原因として主としてしばしば挙げられるのは自然の猛威への恐怖心であるが、自然についての科学的知識の増加や防災意識の高まりとともに、極度の未開発地域を除けば軽減されていくことは

恐らく疑いない。しかし、自然という概念を宇宙規模のものとして考える場合には、実は、人類が知りえた宇宙の構成物質は、宇宙全体の僅かに約 4 パーセントでしかなく、残りは全く未知であることや、宇宙的スケールで地球を危機に晒す現象の予知も出来ないことを考えれば、宇宙論的な疑問や警戒心は永久に残っていくので自然への恐怖心を発生原因から削除することは出来ない。精緻で巨大な宇宙の仕組みが解明されるにつれて、宇宙の大規模構造は多元的・多次元的なものではないかという科学的見解も提唱され、結果の先取りに似た誤った宇宙観が横行する事態も生まれてはいるが、同時に、宇宙の存在そのものへの畏敬の念に似た高度の宗教観念を持つに至る人も生まれている。そこには古代の人類が抱たであろう類の自然への恐怖心というよりは、知的好奇心に由来する明るい希望がある。この点は、宗教心理学としては興味ある意識測定の課題になるであろう。一方、人類の文化的科学技術的進歩とは関係なく、人間は自らが生きていく上で、日常的不可避的に降りかかる人間関係の困難や身体的苦痛や老化に対する救いを求める感情の生起を禁じえない存在であって、そのことを契機とする宗教的心性の発生もある。また、人間の有限性に由来する存在論的な疑問からも宗教的心性が生じることがある。したがって、宗教的心性を抱く契機に個人差はあるとしても、人間が宗教的心性を有する動物 [homo religious] であることは経験的・存在論的にはやはり否定できない。このような理由から、宗教的心性は人間の脳で作られたものに過ぎないという考え方や、科学の進展でいずれ宗教は地上から無くなっていくという短絡的発想は、人間の宗教的心性が宇宙のマクロ構造とミクロ構造に密接に関連しているであろうという深い洞察を見失わせる危険性を持っている。科学は有力な事物の認識方法の一つではあるが、全てではないことを認識しなければならない。物質のみを対象とする科学の方法論は確実に定着しているが、物心両面を持つ人間を対象とする科学的方法を、人類はまだ極めて不十分にしか考案していない。近年、科学的方法の権化である物理学にも漸く新しい兆候が出てきた。現代の物理学は、非物

質的存在と物質的存在の境界を越えて、関係性・相関性・振動性・波動性・周波数といった概念により大自然の謎に立ち向かおうとしている。本稿では、意識(心性)が脳科学や科学的宇宙論の中でどのように解明されつつあり、どのような問題点があるかを踏まえて、宗教的心性の存在性について概観した。

2. 時間・空間の制約を超えた根源的世界への科学的接近

ニュートン力学は、絶対時空間の存在を基本に据え現象の原因は現象の中に存在すること、つまり「局所性」を前提としている。この前提が普遍的ではないことが、アイルランド人でヨーロッパ原子核研究所の物理学者 J.S.ベルによる「ベルの定理」で数学的に明らかにされたため「量子の非局所性」の概念が量子の特異な性質と認知され量子情報科学が現代物理学の中でスタートすることとなった。「ベルの定理」は、「科学における最も深遠な発見」と言われているように、「量子の非局所性」は非常に重要な意味を持つ。なぜならば、その性質からは、技術分野での情報通信論における進歩のみならず、時間と空間に制約された通常の世界の背後に、無時間性の世界と空間の距離による分離の無い非局所性関連の世界が存在していることが示唆される。つまり、全てが関連しあって存在し、その繋がりが尽きることの無い巨大な一つの全体世界が存在するという想定を可能にし、物の領域と心の領域の再統合という問題に重要な根拠を齎す可能性がある。「ベルの定理」に関しては A.アスペクト、N.ギンシ、J.A.ウイラー等の実験によって、一度相互に作用した二個の電子のスピンの、いかに距離が離れていても、片方の電子のスピンを定めれば、いかなる情報やエネルギーの伝達なしに瞬時に他方の電子スピンの反対方向に「情報」として定まる(遠隔伝達、量子テレポーション)ことが実証された。歴史的には、テレポーションの実験は、既に 20 世紀にもあり、ロシアの N・A・コズイレフが宇宙空間に存在する(振じれ場 torsion field)の振じれ波により、粒子の空間移動が光速を遥かに超える速さで伝達されることを提唱し、1986 年にロシアのアキモフ、シポフ、ピンキー

等は、ねじれ場の真空空間において電荷粒子同士が瞬時に情報を伝達することの実験を行っている。1993 年にも C.H.ベネット、C.ブラザード、W.ウッター等は量子テレポーションの可能性を理論で示し、無測定でトランスポート可能な「量子もつれ」を使った手法で光子をテレポーションさせる実験を成功させた。今世紀では 2014 年にオランダでデルフト工科大のロナルド・ハンセン教授等による実験が成功した。日本でも 1998 年に東京大学の古澤明を筆頭とする研究チームが実験に成功したことが米国科学誌「サイエンス」に掲載された。2015 年 7 月に理化学研究所創発物性科学研究センター量子効果デバイス研究チーム(阪大産業科学研究所・東大生産技術研究所共同研究)は、空間的に離れた二個の電子の間に「量子の非局所性」が存在することを確認し、将来の量子計算機や量子通信システム構築のための重要な基礎研究となった。量子テレポーションは、量子物理学の「量子もつれ」という性質と「観測」行為を利用して、二つの粒子間の「情報」(原理的には無限の間隔でも可能)が片方の観測と同時に他方の粒子の情報として、あたかも光速を超えて観測される現象であるが、粒子そのものが瞬間移動する訳ではない。「量子の非局所性」が、物体や人が瞬時に移動出来るような錯覚を人々に与え、安易に SF 小説化した書物があることは、科学知識の通俗化に伴う劣化現象であり残念であると言わざるを得ない。全うに考える立場にあっては、量子テレポーションという特異な物理現象が、将来的に人間の意識と宇宙意識の関係の解明に有用である可能性があるか否かの推移を慎重に考察していくという基本姿勢が重要となる。意識の非局所性モデル以外にも、時間・空間の制約を超えた根源的世界の科学モデルがあり、ディビッド・ボームと カール・プリブラムが提唱した「宇宙と脳のホログラフィックモデル」は注目されている。ホログラムは周波数領域であり、全ての事象が他の全ての事象に包み込まれて不可分の仕方ですべてが相互に関連しているため、時間と空間の枠組みが存在しない。ボームが提唱する秩序の様態論では、現実世界である「はじき出された秩序」では時間と空間の分離があり、臨死体験などの神秘体験で立ち入られる

「包み困れた秩序」では時間と空間の制約が消滅するとされる。D.E.ワトソンは、四次元時空連続体では、量子一貫性(コヒーレンス)が支配して過去・現在・未来の時間分離と空間の分離[距離]は存在しないが、波動関数の収斂によって脱コヒーレンスになり、時間と空間の分離のある 3 次元空間に移行するとしている。M.ガーミンによれば、量子の波動関数の崩壊は普遍的なメンタルプロセスであり、マインド(mind)の非局所性が存在するという。フランスの生物物理学者フィリス・アトウォーターは、真の根源的な実在には時間と空間は無く、その真の実在の波動から時間と空間が生まれ、振動は時間を、波長は空間を生み出し、振動数が変われば、時間も空間も変化するとしている。そして、プランク定数以下の領域には、通常的时间と空間は存在しないと考えられていて、時間が無いと言うことは、時間の流れの停止であり、時間の流れはエントロピーと関連しているから、時間が無いことはエントロピーが無いことであり、老化や死が無いことを意味しているという。真の根源的な実在には現在だけがあって時間が流れないので現在は永遠となり、「永遠の現在」が存在することになる。この推察は、生と死の真相に関する仮説ではあるが科学的な考察であり、意識現象における宇宙と人間の関係、および、生と死の関連をかなり統一的に説明しうる視点であると同時に、宇宙的宗教心の存在性と深く関わる事柄といえよう。なぜなら「永遠の現在」の感得は宗教的覚醒に関する心理状態の重要な特徴の一つとされるからである。

3. 物質観の変貌と宗教心理学へのインパクト

人間の身体が物質で構成されていることを否定する人はいないが、1900 年代中期の理論物理学において、従来の物質観を大きく変えるような見方が出てきた。物質は究極的にはエネルギーと等価であることが発見され、その後の研究で原子・電子・中性子・陽子・光子・イオンなどの総称である量子[素粒子]は粒子性と波動性を持つことが突き止められた。現代の理論物理学は、我々の宇宙における物質の約 96 パーセントが内容不明なダークマターとダークエネルギーに満たされていることを理論的に推測した。これらの事

柄は、人間の存在性を宇宙との関連で捉えることの必要性が従来にも増して重要になってきたことを意味している。哲学的宗教的な宇宙論は昔から存在し、人間存在の根源的な問題は、人間と宇宙の優位性の関係から議論されてきた。心理学の方法論に、哲学的傾向と自然科学的な傾向が今日も共存している遠因もそのような背景によるものである。その意味では、人間が宇宙内存在であることを踏まえた包括的視点が自然科学由来の見解で随時補強される人間心理学の構築が待たれる。人間性心理学の台頭は、その流れの発端を築いたが、哲学的な面が強く経験科学的な手法が手薄である感が否めない。その後は脳科学の進歩などから、意識の問題を脳との関係で究明しようとする流れが起こり、量子脳理論などの試みが出てきた。人体も宇宙内存在である以上、量子力学の現象に従うことになるので、今後の進展が注目される。量子の微視的な物理現象について取り扱う量子力学は、1922年にノーベル物理学賞を受賞したニールス・ボーアの原子構造の研究により確立されが、心理学関連では前述の「量子の非局所性」と呼ばれる特異な現象が注目されている。この現象は特殊相対性理論と整合的ではないという問題を含んでいる。なぜならば、「量子の非局所性」という現象は、アルバート・アインシュタインが確立した現代物理学の根幹をなす相対性理論では説明出来ないからである。特殊相対性理論では、光速が物質世界の絶対不変の尺度であり、物質が乗り越えることができないバリアになっているが、量子の非局所性からくる「量子の遠隔伝達」は、宇宙の端から端までを量子の持つ「情報」が瞬時に移動する特異的な事柄である。物理学者ニック・ハーバートは「非局所性の本質は、何ものにも媒介されない遠隔作用である。非局所的相互作用は、一つの場所を他のもう一つの場所と「情報として結び付ける」が、空間を横切ることも無く情報が損なわれることも無くしかも瞬時にこれが成し遂げられる」という。理論量子物理学者ヘンリー・スタップは、「この「結び付け」は、もしかしたら全ての科学の中で最も深い意味を持った発見かもしれない」としている。「量子の非局所性」の理解には、量子真空と行列論の知識が必要になる

が、要は、我々の通常を支配する物理現象の世界[場]の「中」に、あるいは「別」に、量子的真空の世界を成り立たせる「場」が存在しているであろうことを示唆する。量子力学のシュレジンガー方程式を基礎にした波動力学において、ノイマンは波動関数の収束が人間の観測行為〔相互作用〕と同時に起きると主張し、量子力学の枠組みでは説明できない意識の問題を量子力学に導入した。そのことが「意識の量子論的考察」の先駆けとなったし、数学・宇宙物理学・脳哲学の分野での世界的権威ロジャー・ペンローズが意識と量子力学を関連付けて論じたことは注目を浴びた。しかしながら、観測の過程において何時どのようにして収束するのかについての公共化された明確な理論も証拠も無いため、人間が認知した瞬間に起きることだけを前提として、観測による状態の変化に「意識が介在すること」を論じることは学的に問題があるという見解があることも確かだ、この点については、今後における進展・動向を見守る必要がある。いずれにしても「量子の非局所性」は、人間の意志伝達や、意志の超個的〔トランスパーソナル〕で精妙な結び付きについての研究〔臨死体験研究・スピリチュアリティ研究など〕を含む宗教心理学に新しいインパクトを齎すことになった。

4. 時空の制約を超えた意識の非局所性

人間の身体は時間と空間に制約されているが、人間の意識は時間と空間の壁を越えて、過去・現在・未来のことや、遠方の事物を意識〔思考〕できる。H.マーゲノーによれば、物質は、素粒子レベルでは異なる個〔One〕は統合されて統一性（Oneness）を維持すると同時に個性性を維持するという。そして、この事実は宇宙意識（Universal Mind, One Mind）の存在を示唆しているという。宇宙意識には時間と空間は無く、全ての時間と空間を包含している。宇宙意識には時間の制約がないので記憶の必要はなく、人間一人一人の意識は本質的には非局所的な宇宙意識なのだが、実際には、タイムスリット・個という壁・量子力学の確率論的な壁という肉体的制約を負わされているという。J.S.チャークによれば、意識が発生する源である量子の世界は世界

構成の基本であり「非局所的」であるから時間も空間も無い。一方、ニュートンの世界はその特殊なケースに過ぎず、意識による分析の様々な方法は、波動関数を問う場合の様々なシエマに過ぎないという。また、宇宙内の各々の状況では問いのシエマの一つが選択されることによって、「非局所性」が崩壊し時間と空間が発生し、非局所的な意識は局所的な物質と相互作用することによって知覚が生じ、意識(空間的なアスペクト)が生まれるという。以上の研究と同類の研究は、臨死体験や体外離脱現象報告の研究に散見できるが、結論的には、人間の通常の意識現象の"背後"に存在する本質を指摘していると見なければならない。要点を概括的に整理すれば次のようになるであろう。①現代物理学の量子力学は、原理的には、量子レベルで人体を含む宇宙のすべての構成体に非局所性と無時間性があることを実験段階で実証した。このことを以って人間意識と"宇宙の意志"を直結させるような短絡思考は禁物だが、人体を含む物質の根源に、時間と空間の分離の無い世界の存在が示唆される。時空を超えた次元のものが感得される構造が生来的に人間に組み込まれている可能性がある。②意識は、肉体という物質界の制約を受けているが、本来は時間と空間の制約を越えて思考したり想像したりする性格を備えている。これは、意識が何らかの仕方で、時間と空間の分離を越えた量子の世界と関連していることを示唆していて、個人の意識は、普遍的な宇宙意識を何らかの仕方で反映している可能性がある。人間には本来的に宇宙内存在として普遍的宇宙意識を感得する特性が組み込まれていて、宗教の発生根拠とされる存在論的不安感は、そのような仕組みによって解消できるように仕込まれている可能性がある。ただ、①②の可能性を科学的に確定する方法論については、今後多様な模索が続くであろう。

5. 意識の源泉についての結論

宗教的心性は意識全般の中で宗教性に特化した意識であるので、意識の源泉がどのように考察されてきたかについて概観してみる。この点については様々な説があり、物質中心主義〔唯物

論〕の立場からは、意識は人間の脳という複雑な物質系が生み出す(随伴現象)に過ぎないとの見解が出され、それを否定する立場からは、心肺停止の患者の中には、脳波図では脳の機能が完全に停止していても停止した時間内の経験記憶を詳細に述べる人が大勢いるとの理由で、脳の機能の停止が意識の停止を意味しないとする見解がだされた。fMRIを用いた研究では、脳の機能と意識との関係が観察されても、脳が意識を「作り出す」ことの確認は出来ていない。哲学者ジェリー・フォードは、物質的なものがどのようにすれば意識を持てるのか誰にも分からないと述べている。唯物論の対極にある観念論は、意識が最初で唯一の存在であるとし、物質は人間の精神が作り出した幻影に過ぎないとする見解をとる。二元論的な立場は、精神と物質の双方が本質的だが、双方は完全に異質であり脳は意識の座であるに過ぎないという見解をとる。脳科学の権威デヴィッド・チャルマーズは「非物質的な意識が意識を持たない物質から如何にして出現するのか」という問題は、脳の研究で説明することは出来ないのではないかとしている。意識の存在根拠を身体に求め得るか否かについてもさまざまな立場がある。チャルマーズの問題意識に正面から取り組み、情報理論における情報量の観点からの意識の理論化を試みたのは、アメリカの精神科医、神経科学者ジュリオ・トノーニで、著作『意識の統合情報理論』は現在非常に高く評価されている。トノーニは、身体システムの情報量 $[\phi]$ を提案している。情報量 $[\phi]$ は、「多様な相互作用」と「統合」を評価〔計量化〕できる指数としての身体システムの情報量で、理論展開の骨子は次のようである。脳に意識が生まれるには、外界からの刺激が前提となる。人間には 800 億個の神経細胞からなる(小脳)と、200 億個の神経細胞からなる(視床一皮質系:これは大脳の本体部分)がある。(備考:理化学研究所脳科学総合センターの調べでは、人間の脳の神経細胞は、大脳皮質に約 140 億個、小脳皮質に約 1000 億、その他プリキンエ細胞など約 2000 個とされる)小脳の神経細胞は、意識が宿るとされる大脳(視床一皮質系)の神経細胞に対して圧倒的に多いが、小脳を切除しても意識が保たれると

いう解剖学的結果から見て意識を生み出す能力は無いとされる。小脳は独立した多数のルーチンモジュールから成るため身体情報量 $[\phi]$ 値は小さい。大脳(視床-皮質系)は、相互作用系が生み出す無数の選択肢から必要な(統合)を行うため $[\phi]$ 値は大きい。そこで、意識を生むものとして(視床-皮質系)という物質を考える。この見方は「物質一元論」を前提としている。「物質一元論」の立場では、意識の発生は偶然と考えるので、「意識」を生命体に与えるための必然的な設計指針が無い。トノーニは、「意識」が大脳(視床-皮質系)という物質を生んだと考えると「意識一元論」が可能となり、「意識」を生命体に与えるための必然的な設計指針が得られるとする。トノーニの最終結論は、「意識は神経を基盤しており、脳の情報の統合量 (ϕ) を測るにより定量化できる」というものである。この理論は、旧来の物理主義をはみ出す内容であり、統合情報量理論は、物理的に観測できる脳活動と主観的な現象を繋ぐものとされる。意識現象はいかなる物理量にも変換出来なかったため、物理的な存在ではなかったが、トノーニの理論はそれを科学で扱うことを可能にしたとの評価がある。アレン脳科学研究所所長で量子力学やカオス理論にも詳しいクリストフ・コッホは、これまで成功してきた物理の方法が、なぜ、脳では使えないのかという問題意識を出発点として、神経系の働きと意識感覚の間をうまく繋ぐ科学的理論はまだ発見されていないとしながらも、科学的説明は出来るという確信を持つ。著作(体験談集)『意識をめぐる冒険』は、宗教と哲学への決別の書とも評価されている。脳外科の世界的権威ワイルダー・ペンフィールドは、『脳と心の神秘』において、心が脳の働きの産物であるとする近代の物心一元論を超えて、心と脳はそれぞれ「相関」しあった二つの基本要素であるとする相関的物心二元論を明確に打ち出し、デカルトの古典的な物心二元論を根本的に修正して再登場させ、生理学・臨床医学界に多くの問題提起をした。ペンフィールドは、脳細胞の活動は振動となって「気(海)」に広がり「心〔意識〕」となるとして、脳と心が密接に相関しているとする。また、ブライアン・L. ワイスは『前世療法—米国精神科医が挑んだ時を越えた癒し』

の中で、変性意識も仏教「八正道」の「正念」に関連しているとし、患者に施した治療報告が心身の二元論を否定できない例を示している。「先に意識があって意識が脳を利用する」という仮説を立てている。中立的立場もあり、ジョン・ヒックは宗教と脳科学の関わりについて賛否両者の対話を勧め、建設的な関係を構築しようとする立場をとる。彼は 21 世紀を代表する宗教哲学者の一人で著作『人はいかにして神と出会うか—宗教多元主義から脳科学への応答』は、心脳問題を出发点に宗教論を論じた名著といわれている。この書では、宗教と相容れない脳科学の諸理論に反駁を加え、多元主義的宗教論を展開するのであるが、要点としては、相関性と同一性を同一視することへの警告となっている。そもそも心と脳が同一であると信ずる積極的証拠は存在しないし、主観的体験(クオリア)の問題さえ説明できていないとして、科学者の陥りやすい還元主義的思考の限界を指摘しながら単純化された心脳同一論に異議を唱える。心と脳の相関関係を一組の踊り子に例え、あるときは一方がメインであるときは片方がメインになるように、心脳問題をバランスよく理解することはできないという。ヒックは自由意思の問題についての考察も鋭く「全ての人間活動が決定論的に脳内科学物質により動かされているという説を信ずることに、多大な勇気と信仰を必要とする。それを信じる客観的証拠が存在しないだけでなく、それを信じることは虚無主義に陥るし、人間存在を脅かすことになる」と述べる。さらには、霊性や死後についても言及している。『宗教は妄想である』を著し、宗教の有害性を主張する進化生物学者・動物行動学者のドーキンスは、設計者仮説〔創造論〕を、遺伝子淘汰論を根拠にして批判し、宗教的心性は脳が作り出す妄想に過ぎないと主張する。ただ、彼の「神は恐らく存在しないであろう」という見方や、科学的に証明できないものは認めないとする姿勢については批判も多く、超越者の存在も非存在も科学的に証明できないことをどのように考えるのかという指摘や、宇宙が構成する物質の約 96 パーセントについて未解明であるのに、その中に住むドーキンス自身が、宇宙内存在であることを認めないという自己矛盾になるのではないか

という指摘もある。

6. 人間の脳の性能と意識の由来についての見方

神経科学者・心理学者・神経科医であるヴィラヤヌル・S・ラマチャンドランによれば、脳の活動状態を理論的に可能な活動性の順列組合せで推定すると、その数は全宇宙の素粒子の数をはるかに超えるという。つまり、人間の脳が生涯分の意識や経験を生み出し保存するために必要なニューロンの推定される操作能力が毎秒 10 の 24 乗個であるのに対して、大脳皮質にはせいぜい 10 の 13 乗個のニューロンしかなく、脳が人間の思考と体験の一部ですら貯蔵することは不可能であるという。これは、脳科学者ヘルムス・ロミーンの見解が支持されることになる。ロミーンは、人間の脳そのものが意識を送り出したり、記憶したり、貯蔵したりすることは無く、それらの情報の「受容器」であるに過ぎないという。オランダの医師ピム・ヴァン・ロメルは、脳は特定の電磁波に同調しそれを視聴覚のデータに変換する受信機にたとえることができるとしている。ラマチャンドランは、自己意識とは、脳の中のゾンビによって脳内に構築されたもの、つまり、自己が脳に宿っているという考えかたは実は幻想であり、脳が現実感覚という幻を感じさせているのだという。心理学では、超心理学の分野で過去に虚偽の実験がなされた不幸な歴史が原因で、死後について扱うことは法度視されてきた面があるが、ロメルは人間の死の本質について、「真実は最後に出てくる、死は身体ではなく、意識の状態なのだ。それを人は"死"と呼ぶ、操作された幻想の(法則)の彼岸で人間を待ち受ける無限の自由を体験するとき、人間は身体から離れていく」という。臨死体験研究では、覚醒している「意識の状態」に関しては、日常の活動中の意識であり、そこでは全ての情報を(現実)として体験する(単一の真実に還元される)のに対して、臨死体験の場合の意識は、身体感覚と現実体験感覚の境界が消滅するが(多数の現実)を体験するとされている。そして、このような臨死体験の論拠は、臨死体験を経験した人々からの報告によって近年信憑性あるものになってきている。国際臨死体験

協会 (IANDS : International Association for Near-Death Studies) にも多くの実例が報告されている。臨死体験話の多くは、興味本位の神秘体験話として非科学的とされてきた面が多いが、1013 年にミシガン大学研究チームがラットを用いた動物実験で心肺停止後にも高度に覚醒していることを示す脳波の測定に成功してアメリカ科学アカデミーの紀要に紹介されるなど、科学的解明の黎明を迎えている。したがって、臨死体験から得られるデータは、宗教心理学にとって極めて有用となる。臨死体験については脳内現象説・ホログラム仮説・変性意識説・霊的現象説など多くの説明原理があり詳説を省くが、これまで神経科学的研究の前提であった「心・意識は脳が生み出す」とする「心脳一元論」が、臨死体験研究によって再検討の対象になってきていることは確かであろう。心脳一元論の変更を迫る仮説としては、「脳が意識を作り出すのではなく、脳により意識の知覚がなされる」や「脳の機能は、本来の意識の働きを制限し選別する」や「脳は意識の処理加工器官である」などがある。このような流れに即して考えれば、宗教的心性の存在根拠も「意識が脳の物理的構造から生み出される」事"以外"に求めることが可能となろう。

7. 量子論をバックとする宗教的心性の存在可能性

意識が脳の物理的構造から生み出されない場合、現代の量子論からどのような発想が出るであろうか。量子電磁力学の理論物理学者フリーマン・ダイソンや、有機体的自然観を持った宗教哲学・科学哲学・数学者であるアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドは、基本的な粒子も含めて、全ての物質は何がしかの程度に全て原意識(プロトコンシャス)を持っており、完全に非物質的な意識というものも存在しないという。脳内のニューロン組織では、低いレベルにある意識を持った物質が、組織の高いレベルにある意識を持った物質を生み出し、心は全ての存在に、一様に同じ成熟度で分布しているのではなく、心も物質と同じように、進化するという趣旨の主張をしている。現代の量子力学の物質観は、量子力学における物質は不活性な物質(サブスタンス)ではなく常

にとりうる選択肢の中から一つを選択している活動的な作用物質(エージェント)であるとみる。自然哲学的に考えれば、物質(ヒュシス:自然)と精神(フシケ:魂)の両方が共に存在の基本的な相として始めから存在しているということであろうか。齊藤忠資は論説「脳: 肉体を超える場としての意識」で、意識は局所化から解放されれば、脳から離れ、振動する場として非局所化されるとして、脳死体験中の脳の状態を論じているのであるが、脳が、量子よりなる宇宙との相関性の橋頭堡的役割を有するのであれば、さらに一般化して普遍的宇宙意識が人間の宗教的心性に存在する根拠に繋がる可能性が出てくるであろう。マイケル・タルボットは、『ホログラフィック・ユニバース— 時空を超える意識』の中で、人間の本質は(意識・認識)という「周波数エネルギー」であり、宇宙のあらゆるものは(波形情報の場)で出来ていて、意識は何らかの波形で肉体と結び付き"時空を超えて"移動出来るという。宗教的心性が宇宙との繋がりを求める根源的意識の一つであるとの発想が、量子論からも援護されるならば、宗教的心性は極めて強固な存在基礎を与えられることになる。

8. 脳ホログラフィ理論と意識場

現代物理学は、物理現象全てを説明しうる「場の理論」(統一場理論)の完成を目指して過去半世紀にわたり進展してきたのであるが、現在においては、場の理論が最上であるとする信念は再吟味の余地があるとされている。その背景にあるものはホログラフィック原理である。「脳ホログラフィ理論」はジョージタウン大学の心理学・認知科学・神経生理学教授で、スタンフォード大学において脳梁についてのパイオニア的研究業績があるカール・プリブラムによって提唱された。彼は、一般的には、認識機能のホロノミック脳モデルの開発者、記憶痕跡の研究者で知られるのであるが、ホログラフィー原理に着想を得て、人間の脳に関する大胆な仮説「脳ホログラフィ理論」を提唱した。ホログラフィー原理は、ケンブリッジ大学の数学者スチーブン・ホーキングの研究結果にヒントを得て、ヤコブ・ベッケンスタインが提唱したもので、「ある空間領域のエントロピー(情報量)は

領域の体積ではなく表面積によって決定される」という驚異的提唱が根底にある。換言すれば、現在の宇宙が時間軸を持つ三次元空間であるというのは幻想であり、我々が見る空間は、宇宙の次元の地平面に映し出されたホログラムの幻影に過ぎないということになる。そして、現実の宇宙は、平面に記述された情報に過ぎず、全ての本質は情報であり、エネルギーと物質は副次的なものである」という内容である。プリブラムは「脳ホログラフィ理論」を次のように定義する。「人間の脳は、ある数学に則り具体的実存を作り出すが、それは別の次元、すなわち時間・空間を超越しながら有意義でパターン化されている根源的(第一次的)な実在境界からの振動数を解釈することによってなされる。具体的な(実在)を送り出している脳は、ホログラフィック(完全写像法的)宇宙を解釈するホログラム(完全記録写像)である」という。ケン・ウィルバーは著書『空像としての世界— ホログラフィーをパラダイムとして』の中で、「脳の雑な数学的仕組みは、神経細胞と神経細胞の交叉(シナプス)における相互作用におそらく依存している、この相互作用は枝分かれしている軸策上の微細な繊維の網状組織を介して行われる。神経インパルスはこの微細繊維の中で数学を遂行することが出来る電位を持つうちに顕在化してくる。脳における情報はホログラムとして分布している」とし、プリブラムは、超越的経験にもある種の投射が伴っているかも知れないと考えるようになったとして、脳ホログラフィ理論が、量子物理学の基礎を築いた物理学者デヴィッド・ボームの「内臓秩序」理論と通底していることは明らかであるとした。そして、プリブラムの考え方は、ホログラフィック・パラダイムとして、神経生理学と物理学を始め自然科学と神秘主義を矛盾無く結び付ける有力な手がかりとなるであろうと賞賛する。なお、プリブラムの最大の業績は、意識を「刺激・反応モデル」から開放するパラダイムを切り開いた点にあるが、いわゆるオカルト的なものに根拠を与えたという指摘は不当であり、極めて科学的なものであることを認識しなければならない。ボームは「我々の日常そのものがホログラフィックな映像のごとく虚像であり、根源には、深い存在の秩序が隠されており、我々の目に映る

幻影を生み出している」という。包み隠された秩序・内在する秩序 (Implicate Order) は暗在系と呼ばれ、開示された秩序・外在秩序 [Explicate Order] は明在系と呼ばれるが、暗在系である宇宙は「量子の海」であり、明在系としての世界の真実の姿とは、量子固有の振動「波」つまり波動で出来ているという。また、脳は、宇宙の波動を、見慣れた物に「変換する装置」であって、人の日常は暗在系の影 [ホログラム] が明在系として投影された (幻想) に過ぎないとされる。ボームが構築した理論の紹介解説をした前出のマイケル・タルボットの著作に『投影された宇宙—ホログラフィック・ユニバースへの招待』があり、多くの読者を得たが、ボーム自身が著した『全体性と内臓秩序』には、「空間のあらゆる領域はエネルギーの場であふれている。物理的には一つの波動の持てる最小エネルギー量は、わずか 1 立方センチの空間に、宇宙の物質エネルギー総量よりも大きなエネルギーが存在している。物質は、隠されたエネルギーの海としての空間から独立しているのではなく、その空間の一部としてある。空間と物質は同じ生地の一部であり、隠された深遠な一部としてある。空間は真空ではなく充満状態であり、人類を含めた一切万物の基盤である」と記されている。相対性理論も量子論も、事物は認識体との相対によってしか存在しないという帰結を持っていて、客観的時空や絶対的存在は認めていないのであるが、ホログラフィー原理における「内在する秩序」が、情報としての意識の場 (意識場) であることは、意識を振動するエネルギー場として考えるモデルによって、意識が脳と相互作用で脳内に局所化されることや、逆に、脳内の局所化から開放された意識は、脳 (肉体、物質) を超えて非局所化されることを科学的文脈で説明出来ることになる。したがって、仮説的構成概念としての (意識場) 概念は非常に有効な概念であると思われる。齊藤忠資は論説「意識の拡大と脳による制約: 臨死体験に関する一考察」の中で、「脳は意識の発生器ではなく、場としての意識を受信し、変換し、脳内に意識を局所化させる装置である。脳による局所化から開放されれば振動するエネルギー場として非局所化される。意識と脳の相互作用を可能にし、両者を結合させているのは量

子力学的な性格と思われる。これが崩壊すれば脳と意識は相互作用出来なくなる」という。そして意識の体外離脱現象の原理については「体外離脱現象が、振動するエネルギー場としての意識の出来事であれば、体外離脱後の空間上の特定の視点とテレポーションする空間上の特定の位置が瞬時に移動するのも、非局所的な場の中の局所化が固定的ではなく、振動数によって瞬時にシフトするからである」と述べている。さらに、臨死体験者が宇宙との一体感を持つとされる原理については次のように記している。「全体意識は、時間と空間のバリアを超えて宇宙と一体となった非局所意識である。脳は意識場中の周波数をダウンさせて全体意識を 4 次元時空連続体の肉体内に閉じ込めるため、通常の個人意識は肉体内にあると感じられるのであるが、臨死体験の事例で明らかのように、肉体から開放された後も、必ずどこか特定の所に視点があって、そこから全ての時間と空間を見たり体験している。このことは、五次元界の全体意識つまり (宇宙意識) の中にも個があって、それは完全な知覚や思考感情を備えた非局在意識体 (光の体) であり、全体意識と一つに統合されている (コヒーレンス) ので、振動する焦点のように絶えず振動数をシフトすることによって移動し変容することを示している。臨死体験では、脳の制約から解放されると、周波数がアップされ、個人意識は、意識を拡張して、全体意識と一体となり、脳に制約されると周波数を下げ個人意識へと収縮すると考えられる。このことは量子の波動関数の収縮の現われと見ることが出来る。」ここでの要点は、脳が意識と知覚を制約する装置であるということと、短期間であれ、脳が宇宙意識へと誘う仕組みを持つということである。意識を持つことはエネルギーを要することであり、意識がエネルギー場であることには合理性がある上、真空エネルギーは宇宙に充溢しているから、意識が宇宙に遍在していることになる。この場合、宇宙意識の人称的主体はどのようなのだろうか。宇宙に偏在する意識は、主に東洋思想にしばしば登場し、普遍意識・無限意識・宇宙意識・絶対意識・根源意識などと呼ばれ、空蟬の人間存在に対する主体は "Something Great" な存在となる。この場合、人間の意識は

普遍意識に由来するホログラフィックな意識と見ることが可能であろう。宇宙との一体感を感じるという心情(内省報告)は多数あり、斉藤の考察が、意識の体外離脱現象の考察に止まらず、今後の量子論の発展に応じた人間の宗教的心性研究の一つの方法論を提供する可能性を持つ。

9. 神聖な存在の認識可能性

宗教的心性が文化相対的なものであり人類に生得的に存在する心性であることに疑問を呈するドーキンスは、自身としては汎神論的なものを一部容認している面はあるものの「宗教は人間が創造した壮大な虚構かも知れないが、その中に人生の助けになることがあるならば、宗教的生き方も生き方の一つだ」と述べて、宗教現象の功利的側面しか評価しようとしな。確かにその論調には、超越したものを人間がどうして知ることが出来るのかという意図が汲み取れる。この点に関連しては、かつて、イギリスのマルクス主義者・哲学者テリー・イーグルトンが『宗教とは何か』の中で「神が存在するということが人間の経験合理性において分かるというのは、妄想だ。同様に、神が存在しないということが合理的に証明できたというのも妄想だ。なぜなら、人間に表象し得て分かった神は、神でないからである。分かり得ないと分かったその神も、神ではない。経験思考を超えている謎で無ければ神ではない。神は死んだというが、それは人間の頭の中に抱かれた観念の神である」と記していることが興味深くなる。こうなると、神は全く人間には理解不可能となり、信仰の対象とならなくなる。神(または絶対者または偉大なる知性)の存在性については多くの議論があるが、設計者仮説[ID論]には認識論的無限後退が生じる。したがって、神聖な存在の認識可能性は、最終的には、個々の人間の感性が神聖な存在を認識する能力を有するか否かという問題に帰着する。

10. 宗教的心性の科学性の担保と宗教心理学への提案

科学的言辞を保証するものは間主観性であるが、人間性を扱う各心理学においては、間主観性の解釈について大きな温度差がある。意識の問題に客観性を与えようとする試みとして、人間

の意識のレベルを進化発達段階として捉えようとする方法論が現れた。アブラハム・H. マスローの発達段階説は現代における出発点的なものであり、ケン・ウィルバーの意識進化の六段階プロセス論(生命を持たない物質[エネルギーに属する、<物理的意識>]→動物が持つ生物的意識→人間特有の<精神的意識>→元型的・超個的・直感的なく精妙な意識→「元因[コーザル]意識」→"究極の意識"<意識自体>)は、人間の感性と意識の深度のレベルの存在を示した。"最終段階"の"究極の意識"については、人類の意識の中に潜在的に存在していたであろうことを哲学史も示している。これらの学説の問題点は、何処までが類としての進化発達で、何処までが固体内意識の深化なのか必ずしも明瞭でない点にある。人間は通常、日常的煩雑さに紛れ、自らの存在の根拠について考察する機会を持たないことが常態となっているが、根源的にして素朴な存在論的な問いは「何の目的を持って現在を生きているのか」「現在生存している宇宙そのものは、何らかの意識や目的を持っているのか」という問いである。この種の問いへの解答は、往々にして至高経験や絶望経験を契機として意識の上に覚醒化する傾向があり、宇宙の大いなるもの(something great)が啓示として突如として閃くことは宗教祖師の啓示内容の中に見られる。人間に宗教的心性が当初から付与されていなければ、啓示としての情報を受信する機能そのものを人間は持てないことになる。その場合、科学性を担保しつつ情報の伝達を保障するのは、量子の非局所性である可能性がある。人間の宗教的感性を信じる者にとってはこれ以上の説明は不要となるが、学的に決着したことにはならない。なぜならば、理性が優位なのか感性が優位なのかという問題が常に存在するからである。科学が哲学と袂を分かって出発したことは科学史が示すところであるが、袂を分かった後も存在論的問題を継承しながら科学が進歩してきたことを科学は認めなければならないし、宗教的心性も自然科学分野からの存在証拠があつて始めて術語的有効性と信頼性が増加することも認めなければならない。心理学者で哲学者のウィリアム・ジェームスはかつて、超常現象について

「それを信じたい人には信じるに足る材料を与えてくれるけれども、疑う人にまで信じるに足る証拠は無い。超常現象の解明というのは本質的にそういう限界を持っている」と述べた。超常現象は特殊な現象であり、その理解については、現象の存在性を含めて、個々の人間の持つ直観力や、現象の周辺境界知識の保有の程度にしか理解出来ない面が常に残るのだが、宗教的心性の理解も同様の側面を持っている。宗教的心性は、すべて人為的慣習的に形成されたものであると頑強に主張するのであれば、自然科学の先端をカバーしている現代の量子論が、量子的存在である人間の記憶や精神の所在を、脳髄外の量子的真空場に措定しつつあることへの反論が必要になろう。現代の還元主義的な量子論を、心や生命を説明する量子論に拡大することの必要性を説くスイスの物理学者ブライアン・D. ジョセフソンは、「量子の非局所性」が生命現象や意識状態に関わる可能性を指摘して「The Paranomal and Platonic World」を著し、東洋の神秘主義の科学的理解や、超心理的現象の研究も行っている。デイビッド・ピートのように「宇宙の中の人間の位置付けや、物質の創生、宇宙の構成、生命の起源に関心を持つことは科学者の本領である」という学者もいれば、スチーヴン・ワインバーグのように「物理法則は人間存在の明確な目的を与えるものではない」という宇宙物理学者もいるが、大切なことは、自然科学面の学術研究が、人間と宇宙の繋がりに意識の問題についての射程を広げつつあることへの事実認識と、アーヴィン・ラズロが『生ける宇宙—科学による万物の一貫性の発見』で主張するように、循環的創生消滅を繰り返すであろう宇宙は、意識と情報が量子論的に相互関連し人間の意識は常に宇宙意識と繋がっているという壮大な宇宙観が、真摯な科学的考察の対象となりつつあるという事実認識であろう。人間が宇宙意識を感受できることは、人間が宗教的心性を持つことの一つの証となる。人間が素朴な形で持つ汎神論的な宗教感情も、人間が宇宙内存在であることと関連している可能性があるものであり、「受容器」としての人間の脳が、汎神論的な宗教感情を低位の宇宙意識として取り込める能力を生得的に保有している可能性が

ある。だから、宗教的心性が科学的考察の射程に十分には入っていない現在の時点では、文化人類学的社会的にのみ宗教的心性の存在性を扱うことには慎重でなければならないであろう。そもそも、心理学で扱われる概念は、ほとんどが「仮說的構成概念」なのであり、その存在性が極めて厳密に確定された概念は無いといっても過言ではない。「宗教的心性」もその一つであり、既存の概念指定に難点があれば、より有効な説明原理を模索しなければならない。ただ、宇宙意識を感受出来る人間が現実にも多数存在しているという「出来事」が事実であるということの考察には哲学的問題が生じる。哲学者で心の哲学で非法則的一元論を唱えるドナルド・ディビッドソンは、存在するものは「出来事のみ」で、その出来事が物理的に記述されたり、心的に記述されたり、双方で記述されることがあっても、物理的出来事と心的出来事は本来的に同一ではないという意味で非法則的であり、厳密な法則で結合しているのではないと主張している。その上で、「心的出来事が、物理的出来事を引き起こすことは無いとする見解は「否定」する」ともいう。このような主張を是とすれば、科学哲学者カール・ポパーが提唱するような「反証可能性」を機軸とする科学の定義は、宗教心理学とは親和性が弱いであろう。なぜならば、宗教心理学における研究では仮説を「検証」することは自然科学研究の場合と同様に可能であるが、原因が特定できない出来事を「反証」することは不可能だからである。それでも、宗教心理学は、宗教的行為や宗教体験における個人の心理的状态・過程を内省（introspection）という「検証方法」により明らかにする立場をとる経験科学であり、内省報告は客観性と公共性の確保のため実験計画の整備や行動観察における身体的随伴現象の詳細な記録の蓄積などの「心理的状态・過程」を理性によって対象化する作業が常に求められる。この場合、宗教体験から感受する出来事という第一次経験を〔不完全な〕理性によって内省することは、第一次経験に歪んだ認識論的操作を加えることであって第一次経験そのものではないことを前提としている。哲学者バートランド・ラッセルは『西洋哲学史』の中で、認識論に対する人間の姿勢を、すべてを理

性によって解明しようとする「理性主義」と、何らかの理性を超えた「神秘」を容認する立場に大別した。そして、ゲーデルの「不完全性定理」をはじめ、ハイゼンベルグの「不確定性原理」、ケネス・アロウの「社会的決定不可能性原理」などの登場もあって「理性の限界」が脚光を浴びた。不完全な人間の理性に信頼を置く科学的方法が解明しうる射程は無限ではないので、宗教的心性の存在性の問題は、これまでの科学概念を持ってしては解明できない領域を含むかも知れない。人間と宇宙の繋がりを考察する場合に、そもそも「なぜ宇宙があるのか」という存在論の問題は、ゲーデル流に考えれば、宇宙内存在である人間が解明することが出来ない問題であり永久に解答を得られない。脳自体も、理性的意識ネットワークと感情的ネットワークを同時に持ち、葛藤する存在であるから理性は万全ではない。神経科学者ディビッド・イーグルマンは『意識は傍観者である—脳の知られざる営み』の中で、脳は認知的・体系的・明示的・分析的・内省的面をカバーする理性的意識ネットワークと、自動的・潜在的・発見的・直感的・全体的・反作用的・衝動的面をカバーする感情的ネットワークを持ち、両ネットワークは常に葛藤競合しているという。これはラマチャンドランの脳の見方と同様であり、宗教的心性も覚醒化したり潜在化したりする存在として、宇宙との相関性を感得する心性であろう。実は、脳科学に携わる人々の心も葛藤競合にある。例えば、治療と実験の一線で活躍したワイルダー・ペンフィールドは、当初は、心は脳の仕組みで全てを説明出来るとしていたが、『脳と心の正体』を著した時期には、心の働きは脳の仕組みで説明出来るものではないという正反対の見解を述べ、さらに、心は身体を離れて存続し得るのではないかという考えに至り、靈魂の死後存続も認める方向に近づいた。このように、宗教的心性の存在性の問題の考察には、従来の科学概念を拡大しない限り方法論的な行き詰まりが出てくるであろう。ミルチア・エリアーデは『宗教の歴史と意味』の中で、純粋な宗教現象はあり得ないとして、宗教現象は社会組織・経済活動・個人の心理条件との相互関係であるとしたのだが、そこには宇宙との相互関係は含まれていない。今後の宗教心理学

においては、宇宙と人間の関係における意識の問題を、個人の心理条件の重要な側面として捉え、量子論などの現代科学が提供する知見から考察していく事が大切ではないだろうか。その事により人間の宗教的心性が実在することの蓋然性がより一層高まれば、宗教心理学の学的射程拡大になるであろう。宗教ほど定義が多い学問領域は珍しい。心理学者ジェームス・H.リューウバは多くの定義の観点を三種に分類し、主知的 (intellectualistic)、主情的 [affectivistic]、主意的実践的 (voluntaristic or practical) とした。主知的定義として古くからある定義に、マックス・ミュラーの「無限なるものを認知する心の能力」があり、主意的実践的定義には C.P. ティーレの「人間の原初的無意識的生得的な無限感覚」がある。この表現に見られる「無限」は不可知な大宇宙を含む大自然に対する人間の感覚・意識が根底にあるであろう。不可知を常に克服しようとする人類の努力は科学するという営みの原動力であり将来に亘って続いていくであろう。したがって宗教の定義によって宗教的心性の解明の方法が複数あることは不自然ではないにしても、科学から見た宗教的心性の存在性という視点は常に堅持していかなければならないと思われる。本稿の目標"科学から見た宗教的心性の存在性について"は、現段階では平行羅列的な紹介にならざるを得ないのだが、新しい潮流も加わった。量子論や宇宙論などのニュートン力学を越える知識については、理系の学部で学ぶ学生以外は、数学的な基礎との関係もあり正式に学ぶ機会が限られるが、巷間には量子論や宇宙論の啓蒙書籍は溢れている。そのような環境の中では、各世代の宗教に対する意識も様々に変化していくであろう。宗教心理学は、社会に宗教現象の正しい見方を普及定着させる役割や、福祉現場への教育ノウハウの提供と同時に、人間の宗教的心性の出所を、自然科学に裏付けられた知見をも積極的に摂取して考察していくことが必要になるとと思われる。

参照・引用文献

日置善郎『量子力学—その基本的な構成』吉岡書店 2001

- 小出昭一郎『量子力学 I』裳華房 1990
- 森田邦久『量子力学の哲学— 非実在性・非局所性・粒子と波の二重性』講談社 2011
- レオナルド・サスキンド, ジョージ・ラボフスキー『スタンフォード物理学再入門—量子力学』ISBN-10:4822285189. 2014
- 奥健夫, 尾崎真奈美『共時性のメカニズムに関する量子ホログラフィック宇宙論的考察』(A Study on Synchronicity Based on Quantum Holographic Cosmology)」(「journal of International Society of Life Information Science」23(2) 2005 所収)
- 齊藤忠資「意識の拡大と脳による制約:臨死体験に関する一考察 (Expansion of Consciousness and Limitation Of brain)」『広島大学総合科学部紀要Ⅲ人文文化研究』2005 所収)
- 齊藤忠資「脳 肉体を超える場としての意識」[Http://home.hiroshima-u.ac.jp/tadasi/ronbun-32.pdf](http://home.hiroshima-u.ac.jp/tadasi/ronbun-32.pdf)
- 齊藤忠資「ホログラフィック宇宙と臨死体験の世界」(『人間文化研究 11 号』31~50, 2002 所収)
- マイケル・タルボット 川瀬 勝訳『「投影された宇宙—ホログラフィック・ユニバースへの招待』2005
- マイケル・タルボット 川瀬 勝訳『ホログラフィック・ユニバース—時空を超える意識』春秋社 1994 (Michel Talbot, The Holographic Universe.)
- Michael Redhead, Incompleteness, Non locality and Realism: A Prolegomenon to the Philosophy of Quantum Mechanics.1987 (マイケル・L. G. レッドヘッド、石垣寿郎訳『不完全性・非局所性・実在主義・量子力学の哲学序説』みすず書房 1997)
- K.H.Pribram, Holographic Memory. Psychology Today 12,1979,83~84
- Ervin Laszlo, Science and the Akashic Field.2004
- A.ザリンガー「量子テレポーション」『日経サイエンス』2000 年 6 月、20~38 所収
- 茂木健一郎「意識における非局所性の起源」
- 〔『数理科学』NO,448 ソニーコンピューターサイエンス研究所,pp39~pp44 所収)
- アンドリュウ・ニーバーク、茂木健一郎監訳『脳はいかにして神を見るか』PHP 出版 2003
- 松本 治『神の神経学—脳に神の起源を求めて』新生出版 2004
- Bohm,David, Wholeness and the Implicate Order.1980 (デ-ヴィッド・ボーム『全体性と内臓秩序』井上忠, 伊藤笏康, 佐野正博訳 青土社 1996)
- Herbert,Nick., Quantum Reality :Beyond the New Physics 1985
- ニック・ハーバート『量子と実在:不確定性原理からベルの定理へ』林一訳 白揚社 1990
- 齊藤忠資「時間と空間を超える意識」広島大学総合科学部紀要.Ⅲ,人間文化研究巻 12, 2003
- Alfred North Whitehead, Adventures of Ideas.1933(ホワイトヘッド著著作集第 7 巻所収『観念の冒険』松籟社)
- W.Pfaff, B.Hensen, S.B.VanDam etc, Unconditional quantum teleportation between distant solid-state quantum bits. Science 29 May 2014
- H.Margenau,The nature of physical reality :A philosophy of modern physics 1950
- M,Germine , Experimental model for collapse of the quantum wavefunction,www.goerzel.org /dynapschc.
- C,J.S.Charke , A Model of the Fifth Dimension and Transcendent Consciousness 2005
- フィリス・アトウォーター P.M.H.Atwater『臨死体験 未来の記憶—精神世界への新たなる光』原書房 1977
- Elodie R.Dtheil,Spiritualites,jguezeneec.chez.com dutheil01
- D.E.Watson, Enfomy and enformed gestalts,www.sunflower.com
- Alfred North Whitehead, Process and Reality.1929 (ホワイトヘッド著作集第 10 巻所収 齊藤繁雄訳『宗教とその形式』(上)1984

- (下)1985 松籟社)
- Alfred North Whitehead, An inquiry concerning the principles of natural knowledge. 1919
(ホワイトヘッド著作集第 3 巻所収 藤川吉美訳 『自然認識の諸原理』1981 松籟社)
- Dyson, Freeman J, Imagined World. 2006 (林一、林大訳「科学の未来」みすず書房 2006)
ロジャー・ペンローズ 竹内薫 茂木健一郎訳 『ペンローズの量子脳理論—心と意識の科学的基礎を求めて』ちくま学芸文庫 2006 (Roger Penrose, Beyond the Doubting of Shadow, 1997)
- Maslow, A.H. Toward a psychology of being. Princeton. N.J. D. Van Nostrand Co. 1962)
(上田吉一訳『完全なる人間—魂のめざすもの』誠信書房 1964)
- Terry Eagleton, Reason, Faith and Revolution on the God Debate. Yale University Press 2009 (大橋洋一・小林久美子訳『宗教とは何か』青土社 2010)
- Terry Eagleton, The Significance of theory. Blackwell 1990 (山形和美訳『理論の意味作用』法制大學出版局 1997)
- Dawkins, Richar., Un weaving the Rainbow : Science Delusion and the Appetite for Wonder」Allen Lane 1998 (福岡伸一訳『虹の解体—いかにして科学は驚異の扉を開いたのか』早川書房 2001)
- A Devils Chaplain : Reflections on Hope, lie, Science, and Love. Houghton Mifflin Harcourt 2003 (垂水雄二訳『悪魔に仕える牧師—なぜ科学は神を必要としないのか』早川書房 2004.4)
- Dawkins, Richar., The God Delusion. Houghton Mifflin Harcourt 2006 (垂水雄二訳『神は妄想である—宗教との決別』早川書房 2007.5)
- Dawkins, Richar., The Selfish Gene. Oxford University Press 2006 (日高敏高, 岸由二, 羽田節子, 垂水雄二訳『利己的遺伝子』紀伊国屋書店 2006)
- Maslow, A.H, The Further Reaches of Human Nature. 1971 [上田吉一『人間性の最高価値』誠心書房)
- Maslow, A.H, A Theory of Human Motivation (1943, originally published in Psychological Review, 50, 370-396. Available online.)
- Wilber, ken, A Social God; A Brief Introduction to a Transcendental Sociology. 1983 (井上章子『構造としての神』青土社 1984)
- Wilber, ken, Quantum Questions; Mystical Writings of the World's Great Physicists. rev.ed. 2001 (田中三彦『量子の公案』工作舎 1987)
- Wilber, ken, Integral Spilituality. 2006 (松永太郎『インテグラル・スピリチュアリティー』春秋社 2008)
- Wilber, ken, The Eye of Spirit; An Integral Vision for a world Gone Slightly Mad. 3ed 2001 (松永太郎『統合的心理学への道』春秋社 2004)
- Romijn, Herms, About the origins of consciousness: a new multidisciplinary perspective on the relationship between brain and mind. Proc. kon. Ned. Akad. v Vetensch 1977
- V.S. ラマチャンドラン ブレイクスリー・サンドラ 山下篤子訳『脳の中の幽霊』角川書店 2015 (Vilayanurs. Ramachandran, Phantoms in the Brain. 2011)
- David Eagleman, Incogito: The Secret Lives of the Brain 2012 (デイビッド・イーグルマン 大田直子訳『意識は傍観者である—脳の知られざる営み』早川書房 2012)
- IANDS (国際臨死体験協会 International Association for Near-Death Studies) HP
エヴェン・アレグザンダー『ブルーフ・オブ・ヘヴン』早川書房
- George G. Ritche, Elizabeth Sherrill, Return From Tomorrow 1996
松岡良彦他. 藤田一照. 沖永宜司著『脳科学は宗教を解明できるか—脳科学が迫る宗教体験の謎』春秋者 2012

- Hick, John H., *The New Frontier of Religion and Science: Religious Experience Neuroscience and the Transcendence*
- ジョン・ヒック 間瀬啓允・稲田実共訳『人はいかにして神と出会うか—宗教多元主義から脳科学への応答』宝蔵館 2011
- 大阪大学産業科学技術研究所 奥健夫「意識・生命エネルギーの関する量子ホログラフィック宇宙論的考察」[*Journal of International Society of Life Information Science* 23(1) 2005.3 所収「A Study of Consciousness and Life Energy based on Quantum Holographic Cosmology」 (<http://DavidIcke.jp/blog/20090111/>)
- David Icke「Infinite Love Is The Only Truth Everything Else Is Illusion」 (<http://DavidIcke.jp/blog/20090111/>)
- 「アキモフ博士の展開」 (<http://www.pana-wave.com/3/3-e-1.html.pdf>)
- C.H.Bennett,G.B.Brassard,C.Crepeau,R.Jozsa,A.Peres,W.K.Wootters,Teleporting an Unknown Quantum State Via Dual Classical and EPR channels. *Phys.Rev.Lett*70 1993(online)
- ケネス・リング『オメガプロジェクト』講談社 1981
- 日経プレスリリース・[東大,「量子の非局所性」を高精度かつ厳密にすることに成功] (<http://www.release.nikkei.co.jp/detail.cfm?re1ID=383098 & lindID=5>)
- タイム誌 ネット版 (<http://mui-therapy.org/newfinding/near-det-h-experience.html>)
- William James, *The Varieties of Religious Experience: A Study in Human Nature*. 1902 (舛田啓二郎『宗教的経験の諸相』岩波書店 1962)
- スティーヴン・ワインバーグ 小尾信弥訳『究極理論への夢—自然界の採取法則を求めて』 1994.11
- 大栗博司: Steven Weinberg, *To Explain The World*. 2015.4 についての解説 (<http://webronza.asahi.com/science/articles/201504030001.html>)
- ジュリオ・トノーニ, マルテチエロ・マッスィニーニ, 花本和子訳「意識の統合情報理論」亜紀書房 2015 (Giulio Tononi, *Integrated information theory of Consciousness*. 2015)
- ワイルダー・ペンフィールド塚田裕三・山川宏訳『脳と心の正体』法政大学出版局 2011 (Wilder・Penfield, *The Mystery Of the Mind*)
- ミルチア・エリアーデ 前田耕作訳『宗教の歴史と意味』第8巻 せりか書房
- ブライアン・L. ワイス, 山川紘訳「前世療法—米国精神科医が挑んだ時を越えた癒し」PHP 1997
- Christof Koch, *The Quest for consciousness; Neurobiological Approach* 2004 (クリストフ・コッホ, 土屋尚嗣・金井良太訳『意識の探求—神経科学からのアプローチ』岩波書店 2006)
- 佐野 愛 著『意識と意味の位相空間』2014 ブイツーソリューション 2014
- 古澤明『量子テレポーション—瞬間移動は可能か—』講談社 2006
- 下條信輔『意識とは何だろう』講談社 1999
- 半田広重 佐藤博紀「物質の究極と人間の意識」意識物理学研究所講演会記録 オンデマンド版 2015
- F. デビッド・ピート 菅啓次郎訳『シンクロニシティ』朝日出版社 1999
- ブライアン. D. ジョセフソン猪俣修二訳『意識が拓く時空の科学—精神の空間に潜む無限大のエネルギー』2000
- ウィリアム・ウィルソン, 矢島祐利. 大森実訳『近代物理学史』講談社 1973
- Donald .H. Davidson,「 Subjective ,Inter-subjective, Objective」2001 (清塚邦彦, 柏端達也, 篠原成彦訳「主観性・間主観性・客観性」2007(「Great Works」丹羽信治監修『現代哲学への招待』2001 所収)
- カーメン・ブラッカー矢島祐利. 矢島文夫訳『古代

の宇宙論』海鳴社 1976
菅原浩訳, ヒューストン・スミス『忘れられた真理
—世界宗教に共通するヴィジョン』星望社
1992

小口偉一, 堀一郎『宗教学辞典』東京大学出版
会
荒川 紘『東と西の宇宙観 西洋編』『東と西の宇
宙観 東洋編』紀伊国屋書店 2005

著者紹介 佐藤興一

東京理科大学理学部数学科卒業, 同大理学専攻科修了(微分積分学・科学史), 慶應義塾大学大学院
社会心理教育学専攻修士課程修了, 元麗澤大学日本語研修課程講師, 元日本数学会・日本教育心理
学会会員, 現東京大学仏教青年会員, 宗教心理学研究会員, 中等教育現場で永く勤務, 著作・論説
「E.H.エリクソンの自我同一性について」「高校生の時間的展望について」「エニアグラム性格類型論に
よる行動傾向の推定」(日本教育心理学会論文)。

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第 24 号が発行されました。今回の内容は、第 13 回研究発表会（日本心理学会第 79 回大会公募シンポジウム）の報告および佐藤興一先生による寄稿論文となっております。今後も、会員の皆さまのなかでご自身の論文等についてニューズレターに寄稿してみたいとのお考えがありましたら、ぜひ事務局にご相談いただければ幸いです。ニューズレターを始め、これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。(K.M)

[宗教心理学研究会の今後の予定]

2016 年 5 月 21 日(土)

第 7 回研究会

会場: 東京大学 駒場学生相談所

2016 年 5 月 28 日(土)

第 10 回関西地区勉強会

会場: 高槻市立文化会館 集会室 302 号

発行: 宗教心理学研究会

編集: 宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当: 松島公望 [psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページ管理・運営

担当: クリーグ波奈 [psych.religion.web@gmail.com]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/